326
458

山下信義著

體驗錄

新政社版

始

特217
363

錄驗體

山下信義著

新政社版

はしがき

由來、人間には、上根・中根・下根といふ、謂はゆる三根の人があつて存すると云はれる。ところで私自身はといふと、勿論その下根の部類に屬する人間である。それは決して遠慮でない、謙遜でない。眞實、何にも取り柄のない人間である。

×

その私に、若し強いて何か一とつの取り柄を求むるならば、それは私が、物心ついて以來、今日に至るまで、いつも現在の自分に滿足することが出來ず、常により高き生活を望んでもがき通して來たと云ふ一點ではなからうか。

×

體驗錄は、謂はゞその足らない私が、今日まで、脱ぎ捨て脱ぎ捨てゝ來た醜い心の足痕である。例へて云へば、蛇のぬけ殼みたやうなものだ。自分でさへも見る氣がしない。まして之を人樣がごらんになつたら、どんなにか氣持のわるいものであらうかと恐縮する。だから私としては、こんなものを世に送り出さうなどゝは、さら〳〵

思つてゐなかつた。夢にも思はぬところであつた。しかるに、先年來、一方には多年相ゆるす道友の慫慂切なるものあり、從ふて、新政社からの强要やむことを得ず、遂に一切をお任せ申すに至つた次第である。

×

けれども又、顧へつて考へてみると、世には上根・中根の部類に屬する人は少く、下根の部類に屬する人は頗る多い。上根・中根の人の生活體驗が、如何に美しく整へばとて、それは、我等下根のものにとり、天上遙かに望み見る雲の柱に過ぎないであらう。近よつて、直に我がものとすることは、到底、不可能な願ひである。そこへゆくと、私の此の醜い足痕、下根の生活體驗の方が、却て人々に親しみ易く、それだけ交渉深き存在であるかも知れぬ。

×

書中、しば〳〵繰返したであらうやうに、私は今、信仰生活を送つてゐる。信仰生活を送れる者にとつては、それがたとへ何であらうとも、苟くも神の御榮えとなることであるかぎり、自分自身の名譽、不名譽といふが如き、少しも念慮に止むる要がな

い。況んや此の乏しき生活體驗が御緣となつて、たゞ一人の兄弟姉妹をでも神樣にお導き申上げ得たとしたならば、私は、それを以て、滿足すべきである。感謝すべきである。

×

かく考へ來つて、私の心は、急に輕さを覺えた。明るく輝いた。更に下積みの心の奥底からは、希望と歡びさへもが湧き出て來た。

體驗錄よ、さらば往け。

昭和四年十二月九日

臺灣にて

山下信義

體驗錄　目次

第一篇……（一）
一、死魔の舞踏……（一）
二、人間の價値標準……（三）
三、素晴らしい生活軌道……（八）
四、三島に轉住せんとして……（一七）
五、爲されざる未來よ……（二五）
六、一切の解決我に在り……（四五）
七、愛兒を亡へる人に……（四八）
八、祈りの中を往く……（五〇）
九、地蟲は殼を脱け出たり……（五七）

一〇、眞心を阻むもの……（七七）
一一、一切爲し能ふとの確信……（八四）
一二、愛の先驅者……（一〇一）
一三、大いなる生命の所在……（一〇八）

第二篇　片々集

一、他に對する二つの道……（一一二）
二、靈　性……（一一九）
三、お太鼓もち……（一二〇）
四、生活體の統一原理……（一二〇）
五、他人の事がよく眼につく時……（一二一）
六、命令せぬ導き……（一二一）
七、精神的二重生活……（一二一）

八、一歩を讓る心……（一二二）
九、愛の實例……（一二三）
一〇、衝突鬪爭なき目標……（一二四）
一一、懺悔……（一二四）
一二、生命の浪費……（一二五）
一三、先手と後手の動き……（一二六）
一四、神を見出す迄……（一二六）
一五、日々是好日……（一二八）
一六、育ち伸ぶ……（一二九）
一七、惡魔……（一二九）
一八、光ある言葉……（一二九）
一九、罪……（一三〇）

二〇、力　量……（一四〇）
二一、自分の一言一句……（一四一）
二二、闘爭の姿……（一四一）
二三、尊　敬……（一四一）
二四、金持下乘……（一四二）
二五、公憤と私憤……（一四三）
二六、眞の建設はそこから……（一四四）
二七、「立ちて歩め」の一語……（一四五）
二八、頽廢氣分の害毒……（一四六）
二九、子の態度・親の態度……（一四七）
三〇、風袋ぐるみの人間評價を嗤ふ……（一四九）
三一、我は審判かじ……（一五〇）
三二、獲んとするものは之を得ず……（一五一）
三三、自他の力を腐らすものは……（一五二）

第三篇

一、人間生活雜考……（一五三）
二、愛の生活……（一五四）
三、小さな火は風に消えても……（一五七）
四、信仰生活と其前後……（一五八）
五、神を呼ぶ……（一五九）
六、人生の勝負……（一六一）
七、「我」を測る……（一六四）
八、闘志潰ゆ……（一六七）
九、惡口を言はれたら……（一六八）

體驗錄

山下信義

目次

一〇、危きに近寄れば……（一五九）
一一、流れを逆にして泳ぐ……（一八一）
一二、惡毒に克ちたる力……（一八三）
一三、献げきつた生活……（一九一）
一四、自然の默示を讀む……（一九四）
一五、生活統整のこゝろ……（一九九）

第一篇

一　死魔の舞踏

それは過ぐる大正八年一月三十日の事であつた。此の日私は、突如として死に直面したのである。

同夜は福岡の吉見屋旅館で、十一時頃まで書き物をして居ると、少し悪寒がした。で床を命じ、シャツもヅボン下も脱がず、其まゝ急いで床に藻繰込み、輕い不安を感じつゝ眠りについた。軈てお小用を催したので憚りに行つて來た。今は稍體も溫まつたので、シャツを脱ぎヅボン下を取つて床には入つた。すると暫くして、恰も早鐘を打つやうに、胸がドキ〳〵と、激しい動悸を打ち始め、熱さへ漸次高まる樣に思はれて、それは〳〵言ふべからざる不安の念に襲はれた。

丁度其の頃福岡を中心に、附近一帶、流行性感冒が猛獄を極めてゐた。昨日は川島郡長の奥さんが死んだ、今日は少壯醫學士某君が斃れた等と噂が高かつた。しかも斃れた人達は、

何れも前日まではピン〳〵働いて居て、突如發病、直ぐ肺炎を併發して死ぬそうなと云ふ噂で持ち切つて居た時である。自分は、之は的切りそれだなと思つたのである。そう思うと、萬感交々胸を衝いて來た。運命は天に任せて些しも恐れず、死すべき時に死なんぞと豫て覺悟は決めて居るやうなものゝ、生ある限り能う限りの人事を盡して後に天命を俟つべきである。之がせめて、福山か、岡山か、岐阜でゞもある事か、其頃はまだ一向に知人の少ない福岡でのこの發病を情なく思はざるを得なかつた。どうしても自分は大學病院に入院したい。それには昨年來講習に來て知り合ひになつて居る武谷縣教育會長、中村高等女學校長、小鹽、村田の兩視學、之等の人達に何とかお願しようと心の内に考へた。

それから次は看護人だが、家内は幼き三人の子供と、老たる母とを持つてゐる。そうして乘物に極く弱いのだから來て貰うわけには行かぬ。やむを得ぬから某々三人の内、都合のつく人に來て貰ひたいものだと思つた。

それから次には死んだ後のことが考へられて來た。

大方は、家内及び近親に豫め渡してあるあの遺言狀の中に書いてある。其の他の點については、此事はかう、あの事はあゝと、一と通り當面の問題をも片つけて了つた。すると今度は、ゆくりなくも自分自身の辿り來つた過去の生涯について回想し始めたのである。若しも自分が今此の儘に死んでしまふとしたならば、自分の生涯には一體どれだけの意義と價値とがあつたであらうか。又自分の知れる限りに於て、誰が一番自分に感謝してくれるだらうか。誰が一番に自分の死を惜んでくれるだらうか。自分は今日までの生涯に於て、誰かに衷心からの感謝を受ける程の親切を盡したことがあつたゞらうか、どうだらうか。永く長く人に記憶され、又愛惜される程の意義と價値とが果して自分の何處かにあつただらうか、どうだらうか。そんな點が痛切に感ぜられて來た。

そして同時に、自分は本當に今日迄、親に對し子に對し、妻に對し、兄弟に對し、恩人に對し、友人に對して、實に誠の足りない人間であつた事を限りなく淋しく思はれてならなかつた。

「何といふ不出來の自分であつたゞらう」

かく衷心から考へて來た時に、あゝ自分の天命は人力で如何ともする事は出來ないが、何とかして生きられるものならばもつと〳〵生き伸びたい。生きて今度は純眞の信仰生活、即

ち一切活動の動機を神に發する生活をしたいものだと念願したのである。で若しも此時神様が我が眼前に顯はれて、

「どうだ信義！　お前の今日迄の生活は、不純極まるものではなかつたか、就てはこゝですつかり悔い改めて全く生れ更つた人間となり、餘生全部を人のため、御國のために献ぐると云ふ決心ならば、現在お前の身に及ばんとしてゐる死魔の手からお前を救つてやるがどうか、お前の覺悟はどうだ」

こう仰せられるならば、自分は無論二つ返事でその御袖に縋り、「神よ、必ず〳〵仰せの通りに致します故に、此の生命ばかりは今一度お救ひ下さい」と叫んだに違ひない。こんなことを、不安ながらに止め度もなく考へて來た時に、自分の心はそこに漸く一種の落ちつきを見出した。それと同時に、奇なる哉、胸の動悸も漸く鎭まり、熱又頓に薄らいで、やがてウツラ〳〵と眠りに陷つてしまつた。

いつしか夜は明け離れ、光麗かなる朝日は輝き、小鳥の囀る聲さへ長閑に聞へて來る。女中さんが下から火を持つて來た。何時頃かと尋ねると、もう八時過ぎですと云ふ。やをら身

を起して見ると、熱氣は更になく、脈膊が少し早いと思ふ外は、殆んど常と變りはなかつた。天の未だ我を捨てざるを思ひ、衷心から感謝の祈りをさゝげ、此の日を以て、「余の生涯の更生の一新紀元たらしめざるべからず」と固く心と神に誓つたのである。

やがて其中に、武谷縣教育會長がお見へになつたので、昨夜以來の事情を述べて、今日の講演を延期して貰つた。會長は切りと案じて、醫者を呼んで診察させたりして下さる。醫者は「多分輕度の腦貧血を起したものだらう。今は最早大した事なし、たゞ當分靜養を要す」とのことであつた。

醫者から診ると、正にその通りであつたであらうが、私自身にとつては、それは實に有難き神の御救ひに外ならなかつた。靜かにその當夜の事を回想すると、今も尙ほ譬へ方なき感謝の念と感激の情に充たされる。（大正十四年十二月）

二　人間の價値標準

人間の價値標準は、その人の周圍に、その人故に救はれ、その人故に人間らしくなつた人が幾人あるかで決まる。之を言ひ換へると、人を救ふことそれ自身が、すなはち自分の價値を作ることなのである。

然るに多くの人々は、たゞ人の爲だとのみ思つてゐるから、その人の忘恩的態度が癪に障つたり、少くとも之を恩顧ぶつたりしたくなる。人を救ふといふことは、人の爲めであるよりも、より多く自己の爲めであることに眼ざめたい。否、自己の爲めだと思ふことさへも、そこにはまだ功利的打算が殘るのである。一切の功利的打算を忘れて、たゞ本心の命ずるまゝに行つて、それが自づと自他の爲めになるのが達人の行動である。

あなたの周圍に、若しもあなた故に救はれ、あなた故に人間らしくなつた人を一人も持たないといふならば、あなたには少しも尊敬の價値がないのである。從つてあなたは生れ甲斐

がないのである。若し夫れあなたの周圍に、あなた故に傷つけられ、あなた故に害はれた幾人かゞあるならば、あなたは生れて來なかつた方がよかつたのである。そんな人を胎んだ腹は呪はるべきである。聖書には「いと小さきものゝ一人を躓かせるよりも、石臼を首にかけられ、海の深みに投げ入れられた方がむしろその人のためにはましだ」とさへ言はれてある。

私は曾て總理大臣と對座して語つた事もある。日本一の金持と相對して座つた事もある。又曾て世界的の大學者と對座して歡談した事もある。けれども私は、彼等に對して決して氣合ひ負けがしなかつた。無論私は、そう云ふ人を偉らい人と思はぬのではない。それ〴〵の意味に於て偉らい人々だとは思つたが、彼等には彼等の偉らさがあり、私には私の偉らさがある。失禮な申分ではあるが、或る意味に於ては私の方が偉らいのではあるまいかとさへ思つた。

處が昨冬、山口縣を巡講中、日本に於ける靈界の偉人と云はれる本間俊平先生に逢つて、すつかりそうした私の自負と矜恃とを打ち碎かれてしまつた。そこには、まるで比べものにも何もならぬ憐れな自分を見出したのである。

それは先生の周圍には、先生故に救はれ、先生故に人間らしい人間になつた人々を、數へ切れないほど持つて居られるのを見たからである。

私は曾て、芝居を見、映畫を見、義太夫又は浪花節を聞き、或は又世間に實際にあつた出來事を見聞きして、覺へず泣かされた幾つもの經驗を持つて居る。その時心して、今自分を泣かした力、自分の目から涙を絞り出さした力は何であるかと驗べて見ると、それはいつでもそれらの人々が、己れを捨てゝ他の爲めに捧げつくした神の如き佛の如き事實、行動、そのものであつた。

私は又、到る處の講習會で、講習生に對して、あなた方が、心から、此の人ならば手を合せて拜めると思ふ樣の人の名を書き出して下さいと云つて、書き出させてみたことがある。

よく人が、今の世の中は、何でもかでも金でなければ駄目だ、金の世の中だ、などゝ云ふが、手を合せて拜める人は？　と云つた時、一人でも、三井とか岩崎とか、又は大倉喜八郎とか、安田善次郎などと書き出した人はなかつた。それから又、位人臣を極めた人も一人も

書き出されては居なかつた。世界的の學者も一人も書き出されて居なかつた。

然らば、どんな人が一番多く書き出されたかといふと、乃木將軍、明治天皇、日蓮上人、親鸞上人、孔子、釋迦、クリスト等であつたのである。

茲に於てか、私は、考へざるを得なかつた。歷史上、澤山の强い偉い將軍の數ある中に於て、何ゆゑ特に乃木將軍だけが人々の心からなる崇拜の的となつてゐるかの理由である。が結局、それは一言で說明し盡さるゝ。將軍は、實に深い愛の人であつた。

日露戰役に際して、旅順の激戰で、將軍は自分の麾下に屬する澤山の人の子を殺された。けれども殺されたのは、たゞに人の子ばかりではなかつた。それと同時に、否むしろそれに先立つて、二人しかない御自分の子を、しかも二人とも殺されてゐる。こゝに將軍の光があると思ふ。無言の裡に將軍の無量の大愛が披瀝されてゐる。三千世界に子を持つた、親の心は皆同じである。子の可愛さは乃公と雖もよく知つて居る。しかし國家の爲めだ、忍んでくれ、お前の子ばかり殺しはしないぞ、乃公も一緒に殺すのだぞ！　と、口には言はなくてもその眞心が自然に現れてゐるのである。だからこそ、此の偉大なる愛の心に對しては、一人

息子を殺した親も、一人息子と怨んぢやすまぬ、二人殺した親もあると、二人の愛兒を、二人とも失はれた將軍の心情に照して自ら慰めたのである。

戰終つて、將軍が新橋驛に凱旋された時の如きも、他の將軍は、いかにも晴れやかに、意氣揚々たるものであつたが、そうしてそれが當り前であつたのに、乃木將軍一人は、打ち萎れ、出かける時の元氣に比べて、意氣頗る消沈して居つた。それは何故であつたか、その時の心持を詠まれた有名な詩がある。

王師百萬强虜を征す
野戰攻城屍山を爲す
恥づ我れ何の顏あつて父老に見えん
凱歌今日幾人か還る

皆んなに見送られて出かける時には澤山の部下であつたが、一將功成つて萬骨枯る、大方は皆殺してしまつて、今日無事に還つて來たものが幾人あるだらう。この澤山の出迎へ人の中には、定めし賴りに思ふ我子に先き立たれた寄るべなき年寄も居るだらう。又連理の片枝

もぎ取られて、空閨に泣く幾人かの未亡人も居るだらう、父を失つた不憫の孤兒も居るだらう。それらを思ふて將軍の胸は張裂くるばかりであつたのである。よしやそれらの人達が、我を許して今こゝに出迎へてくれたればとて、我は面目なくて會はせる顏がないと云ふのである。戰場に於ては敵の心膽を寒からしめた乃木將軍が、感極まつて馬上男泣きに泣かれたのである。强いばかりを武士とは云はぬ。武士はものゝ情を知る。乃木將軍の如きは本當に日本武士の典型である。

かくてその後の乃木將軍の御生活は、實に人間の堪へ得らるゝ最も低い程度のものであつたとの事である。それで居てお亡くなりになつた後には、少しの財產も殘つてゐなかつた。一體どこへ使はれたのであらうか。將軍はなるべく人に知れないように知れないようにと苦心して、旅順で殺した部下の遺族の中の最も氣の毒なものゝ爲に使はれてゐたのであつた。

「今まではすぐれし人と思ひしに人と生れし神にぞありける」

本當に乃木將軍こそは、神の如き心の持主であつた。

恐れ多い申分であるが、明治天皇も、天皇なるが故に手を合せて拜み得ると書き出したの

ではない。天皇は外にも澤山ある。歴代の皇帝、皆仁慈に在しますが、中にも明治天皇は特に御仁慈深くましました。

洩れ承る處によると、明治天皇は、炎熱燒くが如きあの夏の日も、宮中で、曾て一度も暑いと仰言つたことがなかつた。左右の者がそれに氣がついたのは、幾年かの後のことである。或る時、近侍の一人が、その事を申上げると、陛下は直ちに筆をおとりになつて、

「暑しとは言はれざりけりにえかへる水田に立てる賤を思へば」

とお認めの上、之を近侍にお下げ渡しになつた。拜察するに、多くの百姓たちは、百度以上もある炎天の下、しかも皆水田の中で草取をして居る、それを思へばこの宮中に居て、暑いなどゝは言へないとの思召であらう。

又漸く寒さが加はつて來て、御召物をお重ねになられる時も

「あやにしきとり重ねても思ふかな寒さ掩はん袖もなき身を」

と、折にふれ、物にふれ、未だ曾て蒼生の上を御聖慮遊ばさぬ時とてはなかつたのである。就中最も恐れ多かつたのは彼の幸德事件の時であつた。時の總理大臣が一件書類を具して

恐る畏る闕下に之を奏上した。どんな大事に當つても、神色自若として、曾てお顏色を變へられた事のない明治天皇も、この時ばかりは憂色サツト龍顏を掩ひ、何の御言葉もなく、たゞ長大息をなさるゝばかり。暫らくの後、之れ皆朕が不德の致す處だ。

「罪あらば朕をとがめよ天つ神民は我が身の生みし子なれば」

赦せるだけ赦してつかはせとの仰せがあつたので、あの時、何人かは、死刑を免れたのであつた。

かくの如きは、御聖德のほんの一端である。聞けば聞く程、知れば知るだけ、拜まずには居られない。

釋迦の大慈大悲、只その言葉を聞くだけでも、たまらぬ有難さがこもつて居る。

心に大なる慈愛を有するものゝ眼には、常に悲しみの涙、慈しみの涙がにじんで居る。一人その處を得ざるものあれば乃ち我が心痛む。洽く世間を見渡す時に、すべての人の心が痛み、すべての人の魂が傷ついて居る。それを見て、釋迦の心は、胸一杯の悲みで、はち切れそうであつたのである。

鳥は鳴けども涙なし、日蓮は泣かされども涙乾くひまなし、日蓮にしても親鸞にしても、皆釋迦の大慈大悲の流れを汲んだ人達である。

若しそれ、クリストの十字架に至つては、人類愛の最高絶頂、人間もこゝまで來れば既に尊嚴の極を究めたものである。神のやうな人ではなくて、神その物である。

檢し來れば、人間性の基底を流るゝ懷しの泉、その名は愛、愛の泉の心の池に、湛えかねて兩の眼から流れ出づるもの、是れ實に貴き聖なる涙、人間の眼はいつもこの聖き涙で濡れてゐて欲しい。いくら地位が高くても、幾ら富が豐かでも、その人にして若し愛なくば數ふるに足らぬものである。

最も尊きもの、天にありては星、地にありては花、之を人に求むれば美しき愛である。

高い地位、豐かな富、深い智慧、それをつまらぬものだと言ふのではない、只それらのものは、持つ人の心によつて、寶とも仇ともなる人生の手段であつて、愛は人間の本質、人生の目的そのものなのである。（大正十五年一月）

三　素晴しい生活軌道

神を念じ・神と合體する時、私ははち切れるやうな生命充實感を覺える。私の最もうれしいのは此の生命充實感である。之れだにあれば他の何物もいらぬ。之を失ふことは私にとつてはすべてを失ふことである。私の最も恐るゝのは肉體の死ではなくして、此の生命の充實感の喪失である。永生とは此生命充實感を以て肉體的死を超越することである。

神に則する時、我等は直に本調子になり、神を離るゝ時、我等は直にうはゝゝッ調子になり、うはゝゝッ調子になる時、我等は實に隙間だらけになるのである。

惡魔はジツと其機をねらつて居る。

我等が若しやりそこないをしたとしたら、考へて見るがよい。それは必ず我等が神を離れて居た時である。惡魔に機を得させぬ爲めには、我等は常に神樣とピツタリだきついて居る必要がある。

神を信ずるものにも、信ぜぬものにも、等しく思ひ違ひ、考へそこなひをすることはある。それなら神を信ずるものと信ぜぬものとの差は何處にあるかといふと、神を信ずるものは、これは思ひ違ひだ、考へそこないだと氣がつくと、すなほに悔ひ改むるが、神を信ぜざるものは、それが出來ない。思ひ違ひだ、考へそこなひだと知つても、エ、まゝよ、どうせ渡りかけた橋だと云つた調子で、何處までも、その思ひ違ひ、考へそこなひを押通して行く。かくして遂に身を破滅の淵に沈めるのである。

信者も未信者も、等しく共に人である。人なるが故に、信者も未信者も、等しく共に人としての缺點弱點を持つて居る。

信者だつてその心の裏には、時々わるい考へが頭を擡げてくるのは免れぬ。たゞ信者は、その時、直に御名を呼ぶ、さうするとそのわるい考へがすぐと頭を引きこめてしまふ。これは信者にのみめぐまれた特權である。未信者にはこの特權がない。だから一度わるい考へが

その心に頭を擡げたが最後、それは何處までも大きくなつていつて、しまひには我れながらどうすることも出來ないことになつてしまふ。所謂之を蘖にして摘み去らずんば、遂に斧鉞の痛さをまぬがれることが出來ないことになる。

信者だつて未信者だつて、事業に失敗することはある。たゞ信者はいくら大きな失敗をしたつて尙ほ望みを失はない。處が未信者が或る程度以上の失敗をすると、彼れはもう生きる望みを失つてしまふ。それでよく首をくゝつて死んだりする。

我れ若し本當に愛の人であるならば、九尺二間の陋屋に生活してゐても、尙ほ且つおのが妻子たちに「私はどんな金持の妻になつたより、此の人の子と生れたり、此の人の妻となつた事が、此上ない幸福に思ふ」と感じさせることが出來る筈である。九尺二間の陋屋に居て妻子に此の滿足と幸福とを與へることの出來ない人であるならば、如何なる金殿玉樓に住むやうになつても、到底、妻や子に、滿足と幸福とを與ふることの出來ない人であるにちがひない。

見るほどの人が皆羨ましく見えるといふ人、その人は何と云ふ貧弱の生活であらう。眞によく充實せる生活をして居るものには、たとひ總理大臣と相對して坐らうが、たとひ千万長者と相對して坐らうが、少しの羨ましいなんと云ふ感じは起らない筈である。

我等は或程度までは剛情我慢の力を以てして押切ることが出來る。剛情我慢の力では何にも出來ぬと云ふのではない。剛情我慢の力を以てしても大概のことは出來るのである。けれどもその内、必ずそれではどうすることも出來ない破目にぶつツかる。自分は何と云ふ無力だらうと自分で泣きたくなる時がある。その時だ！　神の必要なのは。神のある人はその時信頼の念を催して救はれるのであるが、神のないものはその時自暴自棄になつて亡びてしまふのである。治に居て亂を忘れず、我等は平生に於て神のことを思ふべきである。

幼なきものゝ心には、直に神が宿る。我が子を日曜學校に通はせることは、最も賢い親の心掛けだ。子供の時日曜學校に通つて居たと云ふことが、晩年になつて、どれだけ役立つか

わからない。

それ火事だ！　と云ふやうな非常の場合には、誰れでも本氣を出す。たとへ他働的にもせよ、本氣が出せるのは素々本氣があるからだ。偉人と凡人との差は、本氣の有無ではなくして、たゞそれが續くと續かざるとの差だ。愚の如く魯の如く、よく相續するを以て主中の主となす。同じく善人と惡人との差は、よい心のあるなしではない。一切衆生　悉　有佛性、よい心は誰でも皆持つて居るのである。時に誰の心にもよい心が動く、たゞその正念を相續して何處までもつゞけて行くのが善人であつて、それをつゞけて行くことの出來ない人が惡人になるのである。

私の知つてゐるお醫者さんに、可愛いお嬢さんを失つた人がある。その人は、もとよりいゝお醫者であつたが、その事あつて以來、一層きわだつていゝお醫者となつた。そして彼は次の通り告白した。

「私には七人の子供がありました。それがみんな達者で、嘗て一度も病氣をさせたことが

ない。それだから、子供を病氣になどさせる親を見ると、何處かしらん氣のきかない、注意の足りない人のやうに思はれてならなかつた。でその人を或る程度まで侮辱するやうの心持さへ抱くことがあつたのです。處が最愛の子供を失つて以來の私は、誰の子の病氣を見ても我が子の病氣の時と同じやうの氣持を以て見てあげることが出來、又その親なる人にも心から同情を持つことが出來るやうになつたのです」

ところが私は、又同じく最愛の子を失つた他の人を知つて居る。

その人は始め必ずしもそう惡い人ではなかつたが、我が子を失つて以來、すつかり心が荒んでしまつて、人の子の達者なのを見ると「どうして內の子ばかりあんなに弱くて、よその子はあんなに達者だらうと、よその子の達者なのが癪にさわつてしかたがない」と云ふやうのことを平氣で言ふのである。

先きの人は神を信ずる人であり、後の人は神を知らぬ人であつた。神を信ずるものと信ぜぬものとは、同じ出來ごとにあつても、事實、かうした相違がある。

我等は、自らを害うことなしに人を害うことは出來ない。人を害うことは自らを害うことだ。人の爲めに盡すことをしないで、自らを建設することは出來ない。人の爲めに盡すことが卽ち自己の爲めに盡すことだ。

人間の心と云ふものは、自分はいくらかくすつもりであつても必ず先方に通ずるものである。自分の心の中に先方に對する憎惡の念があれば、その念は必ず先方に通じて居る。自分の心の中に先方に對する不信があれば、その不信は必ず先方の心に映じて居る。それだものの先方だつて、どうしてこちらに對して好感を持てやう。處で今度は、先方のこちらへ對してもつ惡感も又暗默裡にこちらの心に映じてくる、そうすると、こちらの先方に對する憎惡不信の念がいよ〳〵募つてくる。かくして因が果となり、果が因となつて、兩者の關係がいよ〳〵惡化してくる、その惡化の極に達したものが鬼である。鬼と云ふ言葉はあるが、誰も鬼と云ふ動物を見たものはない。鬼とは人間の惡化したものである。

この人間の心の、互に通じ合ひ照し合ふ關係を、物に譬へてみるならば、我が姿が、そのまゝ鏡に映るが如きものであらうか。鏡の中の顏つきをニコ〳〵した氣持のいゝ顏に作りか

へる爲めには、先づ自分の顏をニコ〳〵して氣持のいゝ顏にするより外に道がない。

このわかり切つた理窟がわからぬのは、何とした愚かさであらう。たとへ又このわかり切つた理窟がわかつても、その實行が容易に出來ない。何と云ふ人間は無精者だらう。その愚か者、無精者こそ、誰れあらう、實に我れ自身の姿であるから驚く。

神を信じて生きる。それは何といふ尊い、そうして素晴らしい生活であらう。神を信ぜず、神を怖れぬ生活、それは單なる動物的の存在に過ぎぬ。此の世の成功不成功など、そんなことは問題でない。たゞ我れ〳〵は、神を惧れ、神のみ旨に叶つた、神のよしとする生活を直進すればよい。それこそ本當に素晴らしい人間の生活軌道ある。（大正十五年三月）

四　三島に轉住せんとして

私は、學校を出てから今日までを伊東に暮したが、伊東には中學校も女學校もないので、子供等の教育の都合上、今度、三島に移り住むことに定め、そこに子供本位のささやかな家を建築することにした。

私は社會教育者を以て自ら任じ、それは本當に文字通り、東奔西走、南船北馬、一年の大半を旅から旅に送つてゐる。その間私の最も痛切に感じたことは、我國の殆ど到る處に、行基菩薩とか、日蓮上人とか、親鸞上人、蓮如上人とかの御足跡があつて、その御足跡のある所、そこには必ず大きな寺院がある事だ。ほんのただ一度通過になつた所、ほんのたゞ二三日御滯在になつた所、かりそめにお腰をかけられた石、かりそめにお杖を立てられた所、と云ふようの所が、千載の後までも記念されてゐる事だ。形の上からは、私も同じ樣の働きをしてゐるのだが、私の歩いた跡に、果して何が殘るであらう。それを思ふ時、私は實に淋しくてたまらない。

更に最近私をして、一層この感慨を深からしめたのは、伊東生活の回顧であつた。私は今日まで伊東に十五年餘りを生活した。それは私の最も働き盛りの、三十歳から四十五歳までの十五年間だ。私は近く伊東を去つて三島に移り住むのだ。さて私の此の十五年間の生活が伊東に何を殘したであらう。私が、伊東にあつて、特別御懇意にしたのは大原家、山田家、大田家等だ。それらの家から私が受けた厚意は一々數へつくせぬ程だが、それらの家に何か少しでも役立つた事があつたらうか。何もない。それを思ふ時、私は、實に淋しくてたまらない。

更に私は家庭生活について考へて見た。今日迄私は、子として父母にどれだけの孝養をつくしたであらうか。或は又夫として、親として、又主人として妻に子等に、我家に手傳つてくれた男女幾多の諸君に對して、どれだけのよきものを與へる事が出來たであらうか。

死はいつ迫つて來るかわからない。人間は死の神がいつ來ても、ほゝえみて逝かるゝほどに生きて置かねばならぬ。これで今、私が突如死んだとしたら、あとに何のよきものが殘るだらう。私は何のためにこの世に生れて來たのか一向わけのわからぬことになる。それを思

ひ、之を思ふ時に、私はもう淋しさに居たゝまらなくなつて來た。やるせなき胸を抱いて、私は、幾度か人目なき自分の部屋で長大息を洩らしたことであつたらう。獨り愁然として、天地に對し、迫り來る寂寥の感に堪へ兼ねて私は幾度泣き崩れたことであつたらう。

その時思ひ出したのが、セントヘレナに於けるナポレオンの晩年である。彼はその全盛時代に於ては、古來人傑多しと雖も、自分ほど大活躍をしたものはあるまいと、頗る得意の鼻をうごめかしたものだ。然るに今や囚はれの身となつて、この小さな離れ小島に流されて、形影相憐れむ幾年かの月日を送り、命數將に盡きんとして、靜かに自分の過ぎ越し方を想ひ回せば、ありし日の榮華は、夢？　幻？　自分の爲し來つた一切は、月日と共にみな消へ去つてしまふのである。この時彼が端なくも聯想したのは、ナザレの人イエスの生涯である。イエスの生涯は、その在世中は、空飛ぶ鳥に巣あり、狐には穴あり、されども我には枕する處なしと云ふ、まことに悲慘極まる生存であつたが、彼の死後、その教へは、年と共に人の心に深く喰ひ込んで、世界の隅々、地の果てに至るまで擴がつて行き、今や無數の信徒は涙ぐましきまでの敬虔の姿をとつて、その前に跪づくのである。然るに自分はどうであらうか。

成る程全盛時代には、幾多の者が自分の權威に恐れ、自分の權力におもねり、無條件で自分の前に屈服したけれども、自分が死せる後、自分のために心から跪づくものは恐らく一人もあるまい。思ふに是れ、イエスは人間性の最高最深のものを生かしたに反して、自分は人間性の最劣等、最低級のものを生かしたがためである。あゝ我れ一生を誤てりと、さすが蓋世の英雄も、止めどなき悔恨の涙に暮れたとの事である。

私には、この場合のナポレオンの心情を十分に汲み取ることが出來るやうに思ふ。大小の差こそあれ、ナポレオンのその時の心持は、やがて又私自身の心持でなければならぬ。

私がモット人間性の深い眞實のものを生かして居つたならば、我れ自らももつと幸福であり得たであらうし、又今日迄に自分と接觸した幾多の人にも、少しはよきものを傳へることが出來たであらうものを、考へて見れば、自分の今日迄の生活は、徹底した信仰生活でもなければ、と言つて全くの世俗的のものでもなく、どつち附かずのものであつただけに、私の心は一層淋しいのである。私は、どうしても、どつちか一方に深まらねばならない。どつちか一方に深まるとしたら、世俗生活か信仰生活か、その中の一を選ぶの外ないのである。而して純然たる世俗的生活は、それは到底私の忍び得ざる生活である。

かう云ふ氣持を懷いてゐた私が、大正十四年十二月十三日、山口縣の秋吉で、有名な本間俊平先生にお目にかゝつたのである。勿論私は、それ迄にも、先生の御人格は人から聞き、又先生の御著書は讀ませて戴いてゐたのであつた。けれども目のあたり先生にお目にかゝり、親しく先生の御生活を見るに及んで、私の心はすつかり動かされてしまつたのである。

同じく人間に生を享けて居ながら、之は又何と云ふ大きな生活價値の相違であらう。私はその時、何とも言はれぬ深い感激に打たれたのである。

三島の普請は、日一日と進捗して行く。伊東の舊い生活から、三島の新らしい生活へ移り住む日は日一日と近づいてくる。伊東の無意義無價値の生活を、そのまゝに三島まで引きづつて來ることは、何としても私の忍び得ざる處である。そう思ふと、私の心は、益々動搖し出して來た。そこで私は、本間先生に一書を認めて、耻も外聞も顧みず、何もかも打ちあけて、私の新生活のために祈つて戴くことにしたのであつた。折返し先生からは、有難い返事

が來た。そのお手紙を讀みもて行く内に、私の眼からは止めどなき感涙が湧き出づる。彼のポーロは、我は一番弱くなつた時に一番強い力を得たと云つたが、私も泣き泣き讀んで行く中に、もう之で大丈夫だ、何物にも勝てると云ふ確信を得たのである。今にして思へば、それは實在せるものではなくて、私の疑心の描いた暗鬼であつたが、私がその暗鬼と取り組んで汗だくになり、天地晦冥、善根將に亡び我も阿修羅となつて突つ立ちあがらんとして僅かにこらへ、覺えず「我が神、我が神、何ぞ我を捨て給ふや」と叫んだのである。その時恐るゝ勿れ、我れ今汝のために天地の神に祈つて居るぞと云ふ本間先生の御言葉がハツキリと聞へて來、又私のために斷食までして血の涙を流さんばかりに祈つて居て下さる先生のお姿がまざ〳〵と見へて來たのである。

三月二十九日の晩であつた。その晩は風が強く、今にも雨が降り出しさうであつたが、私は、もう、迚も家族のものと調子を合せて談笑しては居られぬ氣持になつて外へ出た。外へ出た所で、何處へ行くといふ當てのない私だ、偶々その晩、教會にお說教があると聞いてゐたので教會へ行く事にした。

卒直に言ふと、自分は、かなり理屈の多い方で、今まで大概の偉い先生のお話を聽いても頭が批判的にのみ働いて、一向に感心するような事はなかつたのであるが、この晩は、どうしたものか、私はすつかり感傷的になつて居て、說教者なる間島先生の一言一句が、犇々と私の魂に響いて來るのであつた。

その晩の先生のお話の中、或所に夫婦となつて二十五年間、お互に一度も氣まづい思ひをした事のない人達があり、先生はその夫婦自らの言葉を借りて「私共がこんな幸福の生活を送ることの出來るのは、何にも私共に人樣以上の富があつてゞもなければ、又人樣以上の學問があつてゞもない。たゞ私共は、神樣によつて結びつけられた結婚當初のこの幸福を、如何にもして永久に持ち續けて失はぬ樣にしたいものと、結婚生活の第一日から、家庭禮拜を行ひ、その事を切に祈りつゝ今日に及んで居るがためである」と言はれたお話を、私はその時、最も痛切に感じたのである。と申すのは、其の翌日、私共が媒酌人となつて、農場主任の加藤君の結婚式を擧げる事になつて居たからである。どうか之から營まれんとする加藤君達の結婚生活をして、前例夫婦の如く、一生幸福なるものにさせたいものだと祈る心で私の胸は一ぱいになつて來た。

説教が終つて、人々は皆歸つたが、私一人はそのまゝは歸られなかつた。間島先生、小野先生夫婦と暫らく話し、更に私のために、三人して祈つて戴くことにした。私の宗教は、今迄、どちらかと云へば、より多く佛教、殊に禪に親しんで居た。だから私は、お祈りと云ふ様のことをした事はなかつた。家内はクリスト教式、私は佛教式、夫婦二人が別々の形式をとつて居ることは、年寄や子供等の、信仰のつまづきになる事は疾くに氣がついては居り乍ら、そのまゝ未解決にして居たが、この晩先生方にお祈りして貰つてゐると、私も祈らずには居られない氣持になり、遂に祈り出したのである。丁度その時であつた。誰かがこゝには入つて來たといふ氣配がしたのは。祈り終つて見ると、それは加藤君であつた。私の歸りの遲いのを心配して、わざ〳〵迎へに來てくれたのである。それから私は、加藤君と連れ立つて歸り、家人とも話をして、明後四月一日の朝からは、斷然、我家の家庭禮拜を開始する事にきめたのである。

翌三十日、加藤君等の結婚式は極めて嚴肅に滯りなくすんだ。

いよ〳〵四月一日がやつて來た。この日は我家最初の家庭禮拜の日である。家庭禮拜と云つても、それは如何なる順序にやるべきであるかゞ充分にわかつて居ないし、二つには又家の者だけよりも、外から誰か、然るべき人に來て貰ふ方が嚴肅に行くように思はれたので、小野牧師に來てもらふことにした。その頃教會には、色々の働きが續いてゐて、小野牧師はかなり疲れて居たのであるが、私共のこの願ひを快よく承諾された。私共の考へでは始めの一日だけ先生に來て貰へばと思つたのを、先生は三日の朝までつゞけて來て下さつた。さて此の家庭禮拜開始後の我家の驚くべき惠まれ方に就ては、それは實に隨喜讃歎を禁ずることが出來ないほどである。

ちようど家庭禮拜を始めた四月一日のことだつた。之は又何と云ふ不思議の事であらう。思ひ掛けなくも、弟がヒョツコリやつて來た。何もかもぶち明けると、私はこの弟故に今日迄、かなり苦しんだものである。弟と私とは、親と子の如く年齢が違ふ。父の臨終の際に、父は私に「どうかこの弟を自分に代つて人間らしい人間にしてくれよ」との頼みであつた。私は父に「必ず御希望に添ふべく努力致します、どうぞ御安心下さい」と答へ、父

は安心して逝かれたのである。たとへ父のこの特別の頼みがなくとも、弟のためにつくすは兄の道である。私は、どこまでもつくそうとした。然るに私の心は、どうしても弟に通じない、私が近づけば近づくほど、弟は遠ざかるのである。論語のある所で、某なる人が「人は皆兄弟あれど我れ獨りなし」と言はれたのを讀んで、私は覺へず暗涙を呑んだ事もあつた。可愛いさ餘つて憎さ生じ、時に或は烈しい言葉を使つた事もあつた。こんな事では家庭に置くよりいつそ何處かへ預けた方がと思つて他へ預けても見た。けれども、何處へ預けてもそこに落つかない。その後郷里の方へ行つてゐたのであるが、近頃又どこかへ出掛けたと聞いて、人知れず心配して居つたのであつた。その弟が、何處からともなく此日突然やつて來たのである。實を言ふと、之迄は弟がやつて來ても、餘りいゝ感情を以て迎へる事が出來なかつたのである。それで弟も、多くは私の留守にやつて來て、私の歸る頃には去つてしまふと言ふ風であつた。それがこの日は、本當に眞底から、あゝ弟がいゝ處へ來てくれたなとばかりうれしかつた。その心持はすぐに弟の心にも通じたものと見えて、二人はいつになく始めからしんみりと話す事が出來た。

二日の朝となつて、家庭禮拜ははじまつたが、弟は起きては來なかつた。だがしかし、

我々一家が、家庭禮拜をやつてゐるといふ事だけはおぼろげながら知つたものゝ如くであつた。三日の朝、家庭禮拜が始まつた。すると彼は、起き出でて、我々の仲間に加はつたのである。

此の日も例によつて、祈りは導かれたものから始め、一人、二人、三人と祈つて行つた。すると不思議や、弟も遂に祈り出したのである。しかもその祈りは、聲涙共に下るところの、それは〳〵驚くべき熱と力のこもつた眞劍のものであつたのである。ジツと頭を下げて聞いてゐる私には、どうしてもあの弟が祈つてゐるとは思はれず、何でも聖靈そのものが叫ぶかの如く思はれた。冥目端座せる私は、何とも言はれぬ尊さ有難さに心打たれて、覺へず落涙に及んだのである。

黑雲の間に、チラとさやけき月影を眺めたように、私は始めて弟の心の中に潜む貴いものを認めたのである。それによつて、私の弟に對する信、愛、望が急に加はつて來た。と云ふよりも私は、今迄の弟に對する不信、無情、絶望について非常に恥ぢ、又申わけなく感じたのである。つまり私の弟に對する不信、無情、絶望が、弟の心をして、こんなに

まで荒ましたのだと氣がつくと、私は本當に弟に對してすまなくなつて來て、更めて心からなる御詫びをしたのである。けれども弟は、それによつて少しもつけ上るやうのことはなく「兄さんは少しも惡くはなかつたのだ、私一人が惡かつたのです」と言ふ、おゝ何と云ふいぢらしき態度ぞや、二人は遂に手に手を取り合つて嬉し泣きに泣いたのである。

この朝の、この熱と力そのまゝなる弟の祈りは、かく我等兄弟の間の辛い感情の疎隔を取去つたばかりでなく、この偶然の出來事は、期せずして他の人達の心にも强いショックを與へたのであつた。

四日、五日、六日と家庭禮拜の回數を重ぬるに從つて、神よりの恩寵はいよ〳〵加はつてくるのである。家庭禮拜は朝早く暗い内にやるので、子供等をそんなに早く起すことは、健康上如何かと思つて、强いて起さぬ事にしてゐたが、子供等も讃美歌の聲に目を醒まして、一緒になつて喜んで歌ふのであつた。

四月七日、私の出かける朝、みんなは私のために旅先きの危險から守つて下さるように、

又私の働きが、神のみ心を呼ぶものであるようにと、心から祈つてくれる。私は始めて感謝と喜悅と安心とを以て我家を後に旅立つ事が出來たのである。恰もよし、八、九、十、十一日の四日間、伊東の教會の年會が開かれたのである。その時の出來事である。家内は天來の靈火に打たれて、一切の私心我執を悉く燒きつくされて、今は全く生れ更つた人になつたのである。それ以來、彼の女が四圍に及ぼした驚くべき波紋、之が更生でなくて何が更生であらう。かく記す間も、私はたゞもう、感謝と感激で胸が一ぱいである。私の祈りは聽かれ、我家の長い〳〵夜は明けたのである。私は何を以て神のこの鴻大なる御恩寵に對へ奉るべきであらう。たゞもう私の全肉全靈を投げ出して、神の御用に使つて戴くより外にその道を知らないのである。

何の不平もなく、何の不滿もなく、一切悉くが滿足、感謝そのものである。しかも神靈は惻々我を促がして、とてもじつとしては居られない心地。あゝ之が本當に信仰生活だなと思はれた。

顧へつて、この驚くべき靈的躍動の跡を省察するに、

「神は果してあるものだらうか？　無いものだらうか？　あるとしたらそれはどんなものだらう？」

と云ふが如き理智の問題は一向そこに起つて居ない。

「何ごとの在しますかは知らねどもありがたさにぞ涙こぼるゝ」

宗教は之でいゝのである。信ずればいゝのである。見ずして信ずる者は幸ひなり、見ずして信じ、信じて後見ることの出來るのが神である。

人間は、禽獸にはなくて、人間にのみ賦與せられた高い幾多の慾求を持つてゐる。この高い慾求のみが與へられて、それを滿足すべき道が與へられて居ないならば、人間は禽獸よりも慘めな存在である。どう考へて見ても、この世はあまりに儘ならぬ浮世である。人間の生活が、此の世の此の姿だけで終るものとしたならば、人間は餘りにも高く出來すぎてゐる。此の世以上の世界があつて、そこでは人間のこの高い一切の欲求が遺憾なく滿足されるでなくてはならぬ。少くともそうある方が合理的だと云ふのがカントの所謂要請の原理である。人間の中、最も優秀なる理智の持主であるカント自身が、尙ほその理智の解釋を以てして滿足が出來ず、更にそれ以上の解釋を要求してゐるといふこと、それが人間に理智以上のもの

がある何よりの證據である。理智以上のもの、それが靈性である。それについて內村鑑三先生は次の如く言つた。

「我は理性を貴ぶ、然れども我は理性を以てイエスは主なりと信ずる能はず、我は理性を以て聖書は特に神の言なりと信ずる能はず、我は理性を以て罪の贖を信ずる能はず、我は理性を以てキリストの再顯と肉體の復活とを信ずる能はず、理性は我に我が需むる最も善き事を傳へず、我は之を聖靈の直示に待たざるべからず。理性は貴し、然れども神より理性以上の恩賜に與らずして、我は歡喜の人、滿足の人、靈明の人と成る能はざるなり」

內村鑑三先生は、誰れよりも理智に長けた人である。先生がこの理智の世界から靈性の世界に飛躍せられた苦心は、世のなまじ理窟をこねまわす連中などの思ひもよらぬ深刻のものであつたのである。私は、先生の求安錄を讀みつゝ、幾度、卷を掩ふて涙に咽んだ事であつたらう。理智以下のものが、理智以上の世界の消息なる宗教をかれ之れ批議する事ほど、片腹痛いものはない。

そこを更に叮嚀に懇切に咬んでふくめる樣に敎へてゐるのが哥林多前書第二章である。

「神のおのれを愛する者のために備へ給ひしことは、眼未だ見ず、耳未だ聞かず、人の心未だ思はざりし所なり……されど我等には、神之を御靈によりて顯はし給へり、御靈はすべてのことを究め、神の深き處まで究むればなり……神のことは神の靈の外に知るものなし……我等の受けし靈は、世の靈にあらず、神より出づる靈なり、是れ我等に神の給ひしものを知らしめんためなり、又我れ之を語るに人の智慧の教ゆる言を用ひず、御靈の教ゆる言を用ゆ、即ち靈の事に靈の言を當つるなり、性來のまゝなるものは、神の御靈のことを受けず、彼には愚なるものと見ゆればなり、また之を悟ること能はず、御靈のことは御靈によりて辨ふべき者なるが故なり、されば靈に屬するものは、すべての事を辨へよ、而して己れは人に辨へらるゝことなし」

こゝに「世の靈」「人の智慧」とあるは理智のことである。我等は理智以上の、神の靈なるものを以て居る。宗教のことは、此の神の靈によるでなくてはわからないのである。若し信仰が、理智の力を以てしてのみ悟入の出來るもの、理智の力を以てするでなかつたら悟入出來ないもであるならば、人生は物質的に不公平であるよりも、より多く精神的に不公平であると云はねばならぬ。それこそ人類の大多數を占むるプロレタリアートは、もう浮ぶ瀬のな

い事になるのである。

けれども神は、決してそんな無慈悲な方ではなかつた。理智の力の惠まれぬものに、却つてより多く靈の力が惠まれてゐる。理智からではどうしても力ある祈りは出來ない。靈によつて祈る時、その祈りには驚くべき熱と力とがある。靈よりも理智が勝つ時、理智は往々にして信仰のつまづきになる。本當に神はこの事を智者學者にかくして、却つて稚子の如きものに顯はし給ふのである。この世の智者、何處にかある、この世の學者、何處にかある。神は此の世の智者學者を恥かしむる爲めに、却つて幼子の如きものを用ひ給ふ。我等は決して我等の有する薄つぺらな小さな理智に碍げられて、神の大なる賜を受けそこなつてはならぬ。神の愚は人の賢さに勝る。汝等幼子の如くならば神の國に入ること能はずである。靈性の世界は、信で保つ。疑へば直ちに理智以下の世界に墮つるのである。

あゝ、若し我等が之から始めんとする三島の生活に於て、多少にても神のみ榮を顯はすことが出來、いと小さきものゝ一人をでも神の救ひに導くことが出來たならば、それは伊東生活十五年間の回顧の、言ふべからざる淋しさが動機となつて、私共を、この新生活に導き入

れてくれたからである。かく考へ來つた私は、こゝに始めて伊東生活十五ケ年間の清算が、むしろ今後にあることを知つたのである。比較的長かつたこの間の生活に、果して幾何の意義と價値とがあつたかは、今後私共が三島に於て營まんとする生活に於て、どれだけ神のみ榮を顯はす事が出來るか否かによつて決定されるのである。このゆゑに、三島の生活が成功する事は、やがて伊東生活の失敗を取り返すことであり、三島の生活を失敗することは、やがて伊東生活をも失敗に終らす事になり、延いては終生の失敗と云ふことになる。私共は、今、非常なる決心を以て、伊東から三島に轉住せんとするのである。（大正十五年五月）

五　爲されざる未來よ

世に幾何の人が自分の過去を完全なるものとして滿足して居る事だらう。幾何の人が後悔することの一つもなく、又批難されることの一つもない事を悅んで居るだらう。

若し自分の半生が、一年生のお習字の樣に、書き直すことの出來るものだつたら、恐らく總ての人は自分の過去を反古にして了ふであらう。

しかし實際は書き直しを許されぬお互の人生だ。一度爲された行爲は飽くまで爲されたものである。この事實は何物を以てしても打ち消す事は出來ない。と同時に、我等は生命のある限り、なほ爲されない行爲をもつて居る。此の爲されない行爲こそ我等の白紙である。貴い！　だから我々は、徒らに過去に戀々たることは止したがよい。それよりも問題は前途にある。未だ爲されざる未來よ！　それに自分の全生命を打ちこむことを考へたい。

ベルグソンは、たゞほしいまゝに、種々の動機を選定し得るといふのが自由の意味ではな

く、我々の行爲が全體の人格から流れ出して、それがたゞ一つの本質的なる事を示す場合に始めて自由と云ひ得るのであると說いた。

我々の生活が、これでなくてはならぬとか、又はこれ以外如何なる形式をとつてもならぬといふ樣に、たゞ一つの行き道のみを進んでゐるものだつたらば、恐らく過去に對して自らを恥づる心は微塵も起らぬに違ひない。

けれども人間の弱さは此處にある。我々は無人島に漂着して、そこで生活して居るのではない。我々には複雜な環境がある。我々以前の世界、卽ち歷史があり、又我々以後の世界を豫想してゐる。十六億の人間は、同じ地球上に生活を營んで居る。而して自分の一つの行爲は、これ等數知れぬ人々の生活に影響され、又影響しつゝあるのである。環境は我等のバックである。人は皆このバックに調子を合せて拙い踊を躍つて居る。手をあげ、足を動かし、頭を振り、汗みどろになつて背景の變遷に調子を合せることに專心になつてゐる。拙い踊である。藝術味のない踊である。感激の消えた踊である——とは氣付いてゐても、背景との關係上、尙それを持續せねばならぬ所に醒めたる人の無限の苦しみが湧く。

しかし、醒めたる人はその墓場まで自分の苦しみを引きずつて行く必要はない。たゞ勇氣あれば事足りるのである。全か無か、中庸は凡人の最も難しとする所、我等は今迄の惰性によつて生きて行くことに快よしとしなければ、それ等の總てをふり切つて、嚴然と地上に立つがよい。今日迄の建設も累積も、總てを放棄して、たゞ一人、裸足のまゝ大地に立つがよい。さればその時、彼の胸に神は君臨し、生活は新らしく、眞の自由によつて築かれて行くであらう。富める者の天國に入るは駱駝が針の穴を行くよりもなほむつかしいと云ふではないか。

自分の過去に萬斛の涙を注いで後悔するとも、悔ゆることそれのみでは、單なる愚痴に終る。改めなければ何の得る所があらう。

進化論に從へば、動物はその最下等動物である所のアミーバーから次第に進化の道程を經て、遂に人間に至つたものであるといふ。我等も大體に於て進化論を肯定する。けれどもこゝになほ考究すべき大なる難點がある。此の進化論が果して眞理であるならば、人間は更ら

に人間以上の或るものに進化しなければならぬといふことである。人間を以て動物進化の絶頂であると見ることは、到底我等の理性の許容する能はざる所である。

人間以上のあるものとは何であらう。又如何にしたら人間はその人間以上の或るものになる事が出來るであらうか。此の謎題を解くものこそは、實にかつて人間より一段低かつた所の動物が、如何にして人間に進化したかの過程の研究でなければならぬ。

動物中、最も進化したものは人間とされてゐる。而して其次が猿であるとは總ての人の考へである。けれども我々は、今日普通の猿を見て、これがやがては我々と等しき人間に迄進化するものとはどうしても思へない。しかし猿が進化して人間となつた事が事實であるならば、それは猿中のあるものに、猿を以て滿足し得なかつた猿の一群があつたに違ひない。そして彼の一群こそ、理想を描き、信仰に涙し、時々刻々、より偉大ならむとして專念したに相違ない。而して此の恐ろしい奮闘努力が、遂に猿にしてそれに滿足し得ぬ彼を、人間にまで進化させ得たものと見るべきである。

今日の我等が、人間以上のあるものたる事に成功する道も、亦之を措いて他にはあり得ない。かつて猿の描いた理想は人間であつた。今人間の描いてゐる理想は完全な人格である。神である。佛である。されば、我々の絶えざる精進は、やがて其の憧憬の焦點に到達する所の可能性を持つて居るのである。

然し我々は、一朝一夕にこの事が成就するとの夢を見てゐてはならぬ。人類の歴史中、最も古い支那やエジプト、或は又印度からメソポタミヤ平原等の何處の記錄を調べてみても、猿が人間に進化した等の文字を探し出すことは出來ぬではないか。

故に今の人間が、より高き世界に憧れて、そこへ進化するにしても、夫には前の過程と同樣に、限りなく長い年月を要するのである。達せられた一つの理想は、又次の理想を生み、達せられた一つの理想は、又より偉大なる生命を追う。かく不完全なるものから完全なるものへ、小なるものから大なるものへ、神へ、佛へと我々の生活はだん〳〵築き上げられて行かねばならない。而して此の刻々の精進は、啻に我等の一生を通ずるのみならず、幾百千の世紀を隔てゝ、なほも不斷に繼續されねばならぬ久遠の道程である。（大正十三年二月）

六　一切の解決我に在り

教化と云ふ事は、自分を起點として、被教化者との關係が自分から遠くなればなる丈け容易になり、自分に接近すればする丈けむづかしくなつてくると云ふことである。

一日や二日ならどんな神妙な態度でもとつて居られる。自分の日常を少しも知つた人のない遠隔の地に行つて、一般民衆に、あの人は偉い人だと思はれる位の事は、さまでむづかしい事ではない。然し常に何も彼も知られて居る故郷へ來ると、それがたとへ、豫言者であつても、なか〳〵に感心されない。でも他人は未だ表面からのみ我れを見て居るからよいが、妻や兄弟、子供等と云ふ家族のものになると、表面からも裏面からも、スツカリ自分を見て居る。だから家族のものに尊敬されるといふことは、普通の人には出來ないことである。

尊敬して居らぬものを教化するといふことは到底不可能なことである。そこで一番教化の

困難な者は自分に一番近い者といふことになる。自分の妻だと云ふことになる。

昔から、かなり偉い人でも、妻の教化には失敗して居る人が多い。孔子ほどの偉人ですらも「女子と小人は養ひ難し」と云つて、女房には、手こずつたやうである。聖哲ソクラテスも、とう〳〵妻の教化にはあきらめをつけて了つた。文豪トルストイも、彼の妻の信用を得ることは出來なかつた。

けれども、氣がついて見ると、教化の一番むづかしいのは妻ではない。寧ろ自分自身である。自分で自分を「我ながら愛すべし、我ながら貴むべし」と云ふところまで教化が出來れば、それからあとの事は造作ないことである。妻や子供の教化が出來ないのは、畢竟、自分自身の教化が出來ないからだ。自分が成つてゐない癖に他に對して彼れ此れ云ふと、人は却つて反感を起し、惡化することがある。

一切の問題は、たゞ常に我を解決することによつてのみ解決される。（大正十三年三月）

七　愛兒を亡へる人に

子供ほど天眞爛漫なものはない。彼等の思ひには一點の邪氣がない。「幼子の如くならずば神の國に入る事能はず」である。一番神に近いものである。子供と云ふ子供は、みんな可愛い。けんども敏夫君は、わけてもかわいらしい子供であつた。

古い言葉ではあるが、燒野の雉子、夜の鶴だ。子をいつくしまぬ親はないが、敏夫君に對する親達の慈心は人一倍切實なるものがあつた。その敏夫君が突然疾を得て死んでしまつたのである。之がもし生れつき弱い子で、長い間病みわづらつた揚句、遂に死んだと云ふのなら又あきらめる道もあらう。然るに敏夫君は、生來無病、つい昨日まで嬉々として飛び廻り、驅け廻つて遊んでゐたのである。そのやうに元氣なあの敏夫君が、こんなに早く死ならなどゝ誰れが思つたであらう。まるで夢のようだ、おゝ、敏夫君のお父樣の心持はどんなであらう。思ひやるだに此の胸は痛む。私は同情の涙を禁ずる事が出來なかつたのである。

「こんな事なら、生れて來なかつた方がましだつた」

悲痛の餘り、親達としては、こんな愚痴もこぼして見たくなるだらう。無理もない。けれども、あゝけれども、敏夫君は、やはり生れて來た方がよかつたのである。

一寸考へると、餘りにはかない生涯で、何の爲す所もなく死んでしまつたやうな敏夫君ではあつたが、實は、他の何人もまねの出來ない大使命を果して逝つたのである。

敏夫君の生、敏夫君の死、それは決して徒爾ではなかつた。生年僅かに六才、然しそれは決して儚ない人生ではなかつた。

こんな時、我等は、靜かに實人生に就いて考へて見たいのである。一體人間の一番貴いものは何であらう。學問だらうか、非ず。地位だらうか、非ず。富だらうか、非ず。それは實に人間の眞心より出づる愛である。

幾ら深い學問があらうと、幾ら高い地位があらうと、幾ら豐かな富があらうと、若し愛なくばその人は數ふるに足らぬものである。

敏夫君の病が段々重つて行つた時に、敏夫君のお父さまは寢る事も食ふ事も忘れて、たゞ

偏に敏夫君の看護のためにつくされた。敏夫君の一命を取り止めるためならば、自己に屬する一切のものを投げ出すはおろか、かけ替へのない自分の生命そのものさへも喜んで投げ出す覺悟であつたらう。

すべての物の中で、最も大なるものは愛である。愛の中で、最も大なるものは、自分の生命さへも投げ出して厭はぬ大愛である。例へ何萬卷の書を繙いても、たとへどんな大學者の說敎を聽いても、敏夫君のお父さまは、恐らく、之程痛切に愛の深さを體認する事は出來なかつたに違ひない。

お父さまの心の裏には、こんにまでも深い愛の泉がありましたと、お父さまに敎へてあげたのが敏夫君の使命であつた。之こそは敏夫君ならでは、何人も果し得ぬ敏夫君の特別の使命であつた。たゞお父さまに愛のこの深さを體認させるだけの分ならば、敏夫君は何もあのまゝ死んでしまわないで、死線を越えて再び起き上つてもよかつた譯だ。けれども、それでは、折角體認したお父さまの深い愛が、たゞ敏夫君だけに集注されてしまふ。敏夫君の瀕死の病苦によつて體認する事を得たお父さまのこの深い愛を、多くの人の子に擴げるためには、何としても、可愛い敏夫君が亡くなる事が必要であつたのだ。

敏夫君のお父さまは、伊東町の小學校の先生である。敏夫君が達者で此の世にあつた時でも、敏夫君のお父さまは善き先生であつた。けれとも敏夫君が亡くなつて以來、際立つていゝ先生になつて行つた事が見る人の目には寫つて來た。

敏夫君の死によつて、伊東町の多くの子供は、どれだけ大きな仕合せを受ける事が出來たかわからない。

「一粒の麥、もし地に落ちて埋れずばいつ迄もたゞ一粒にてありなん、埋れて死になば多くの實を結ぶべし」

この聖書の句を、私は敏夫君の死によつて如實に味ふことが出來た。

敏夫君の死は決して空しい死ではなかつた。僅か在世六年の敏夫君が、此の世に遺した功績は實に偉大なものであつた。敏夫君の斷末魔の苦悶の現れはそれであつた。いぢらしい敏夫君の死、それはまことに大なる犧牲の死である。敏夫君の死は、自らの罪のための死ではなくて、他の罪のための贖罪の死であつた。

× × × ×

以上は私共が、三島に轉住すべく、正に伊東を立たんとする前日、敏夫君のお父さまがわさ〳〵私共をあの人里離れた山莊に訪ねて下さつた時に、私が敏夫君のお父さまに語つた慰めの言葉であり、勵ましの語であつた。

私は十五年間伊東に居て、敏夫君のお父さまとは常に顏を合せて居たが、この時ほどしんみりと語り合つたことはなかつた、やがて家内も來り會し、三人鼎座して敏夫君の瞑福のために涙の祈りを献げたのである。

その後私は、敏夫君のお父さまに「苦難の理解」と云ふ本をお送りした。然るにこの本が少なからず敏夫君のお父さまの心に働きかけた。

教育の根本は、システム（組織）ではない、プラン（計畫）でもない。愛だ、炎々燃ゆるが如き愛だ。愛がなくして單に技巧をのみ弄する教育家ほど人の子を害ふものはない。教育の大家として誰知らぬ者なきペスタロッヂは、雪深きある朝、學校に行かんとして、路にいたわしき貧者に逢ふた、貧者は靴も穿かずにブル〳〵ふるへてゐる。彼は此貧者を見て見ぬ振して通り去る事は出來なかつた。で直ちに自分のはいてゐる靴を脱いで彼に與へ、自らは

裸足のまゝで登校した。おゝ何たる芳ばしき人の情ぞ！　此の心があつたればこそ、彼は教育の神様になれたのだ。

愛の中で一番強いのは戀愛だ。けれども戀愛はまだ至上愛ではない。そこには多分に醜い「我慾」が躍動してゐる。

人間の現はす愛の中で、一番貴いものは、蓋し親の愛であらう。けれどもこれもまだ至上愛ではない。そこには驚くべき深さはあるが廣さがない。我が子なら眼に入れても痛くはないが、隣りの餓鬼はうるさくて仕方がないと云つた態度である。

最高至上の愛は神の愛だ。神の愛は最も強くして、最も潔い愛だ。最も深くして最も廣い愛だ。

信仰とはその神の愛を我が心に受け容れる事だ。神の愛を受け容れない限り我等は到底救はれない。自らが救はれない限り我等は到底人を救ふことは出來ない。すべての人は、信仰に入る必要があるが、わけても人の子の教養の任に當る小學校の先生には特にその必要があ

る。先生達自身も無論それに氣づかぬではない。世間への氣がね、世間の思わくと云つた弱い心から、いつまでもその不信仰の生活を引きずつてゐるのである。

信仰は人間の最も眞劍の態度だ。決死の覺悟を以てしてのみ入る事が出來るのである。

敏夫君のお父さまは遂に猛然として立ち上つた。眞教育の先驅者として走り出した。今では大膽に教會に出席されるようになつた。

見よ、伊東町の教會は、今や敏夫君のお父さまの仲間入りによつて、焔々たる信仰の猛火が燃え上つて來たではないか。思へば敏夫君の死は、實に大きな死であつた。

（大正十五年六月）

八　祈りの中を往く

我等には理性がある。故に何が善で何が惡であるかはよく分る。善のなすべく、惡のなすべからざることもよくわかる。たゞ爲すべき善は之を爲さず、爲すべからざる惡は之を爲すのである。之が人類の苦惱である。この惱みから救はれるためには、我等はどうしたらいゝのであらうか。

私は始め考へた。人間は譬へて見れば山から堀り出したまゝの鑛石の樣なものである。金にもせよ、銀にもせよ、銅にもせよ、鐵にもせよ、始めから純粹の形で山の中にあるのではない。始めは色々の不純物の混じつて居る粗鑛である。けれども漸次その鑛滓をとり、遂に鑛滓なきに至つて、始めて純粹の金銀銅又は鐵となるのである。人間もその通りで、現在の我々は極めて不純物の多いものであるけれども、だん〳〵修養し練磨して、その混ざりけを取り除けば、遂にはそこに純粹の自己が殘る。であるから、その純粹自己を大切に養成して

さへ行けば、どんな立派な人にでもなれると考へて、私は隨分苦心もし努力もしたものである。けれども、幾ら苦心し、努力しても、私は今日迄、遂に立派な人になれなかつた。

私はポーロと同じく「我が願ふ所の善は之を爲さず、却つて願はざる所の惡は之を爲す、あゝ我れ惱める人なる哉」の嘆聲を發せざるを得なかつたのである。

孔子は日に三度省みよと敎へてくれた。日に三度はおろか、百度千度省みても、私はそこに、たゞどうする事も出來ない自分、醜い、意氣地のない自己を見出すに過ぎなかつたのである。

「人、新に生れずば神の國を見ること能はず」

その時、私の頭に極めて强く響いて來たのがクリストの此お言葉であつた。

それでは新に生れるとはどうする事か、曾てニコデモと云ふ人が此の意味がわからなくて「人はや老いぬれば爭で生るゝことを得んや、再び母の腹に入りて生るゝことを得んや」と反問すると、クリストが「まことに誠に汝に告ぐ、人は水と靈とによりて生れずば神の國に

入る事能はず、肉によりて生るゝものは肉なり、靈によりて生るゝものは靈なり、汝等新に生るべしと我が汝等が言ひしを怪しむな」と仰せられた。

我が裡にいゝものがある。それを養つて行けば、我はどんなにでも偉らい人になれるのだと云つたやうな、そんな、傲慢な、不遜な考へは根こそぎ取つてしまつて、我が裏には何のよきものなし、いゝものはたゞ神に於てのみあるのだと、我々が極度にまでへり下り、我が心の裏から、我と云ひ、我がものと名のつく何物もなき迄に心を貧しくし、心を虛しくし、そこに聖靈を宿し奉り、最早我れ生くるにあらず、神我に生くるなりと云ふ信仰生活に入るより外に、我等が生れ甲斐のある生活を送る道はない。

神が信者にお約束なされた最後のお惠み、最大の賜物は聖靈である。

人間が一度此の聖靈を戴くと、それによつて其人の性格は全く一變する。今迄は哀しんでばかり居た人が、忽ち喜び溢るゝ人になり、今迄は不平不滿ばかり言つてゐた人が、事毎に感謝し滿足する人になり、今迄は働くことの大きらいの人が、働くことがすきになつて、働

かずには居られなくなり、今迄は不人情極まる人が、人一倍愛情深くなり、今迄は吝ん坊で紙一枚人にやるのがいやな人がどん〳〵物を出して人に施すようになり、今迄は金錢の浪費ばかりやつてゐた人が、一錢一厘と雖も無駄使をしなくなる。

その人の性格がこんな風に變つて來るばかりでなく、その性格の變るにつれて、その人の姿態容貌までもが變つて來る。曾ては年百年中苦虫を嚙みつぶした樣の暗い陰氣の顏ばかりしてゐた人が、ニコ〳〵して明るい陽氣の顏になり、曾ては横のものを縱にするさへ物憂くて、少し動くとすぐ體が疲れて溜息ばかりして、やゝともすると頭痛がして起きては居られなかつたと云ふような人が、今は自他共に驚くほどの活動をしても少しも疲れないようになる。曾ては年不相應に年寄じみて見へた人が、めき〳〵と若返つてくる。

その人の性格や風丰がかく變るばかりでなく、その人の見る天地の光景までが全く一變してくるであらう。今迄は何を見ても厭はしく、誰に逢つても氣に喰はず、生きているのもいやで、いつそ死んでしまつた方がよい樣にさへ思つた人が、今は何を見ても美しく、誰を見

ても氣持よく、そこに歡天喜地の新情趣が横溢し來つて、この世がさながら天國の如く感ぜられるのである。

かゝる變化は、決して單なる想像ではない。現に最近、私の周圍の人達の上に顯はれ出た生々しい事實である。

目のあたり、此の驚くべき變化を見せつけられた人達が、自らもそうなりたいものだと願つて、

私達でも聖靈を戴く事が出來るでせうか？

聖靈を戴く爲めには私共はどうすればよいのでせうか？

と尋ねるのである。主、のたまはく、

「汝等の中誰か友あらんに、夜半にその許に往きて『友よ、我に三つのパンを貸せ、わが友旅より來りしに之に供ふべきものなし』と言ふ時、彼内より答へて『我を煩はすな、戸は早閉ず子等は我と共に臥所にあり、起ちて與へ難し』と云ふ事ありとも、我れ汝等に告ぐ、友なるによりて起ちて與へねど、求め切なるにより起ちて其要する程のものを

興へん。われ汝等に告ぐ、求めよ、さらば與へられん、尋ねよ、さらば見出さん、門を叩け、さらば開かれん。すべて求むるものは得、尋ぬる者は見出し、門を叩くものは開かるゝなり、汝等の中、父たる者、誰かその子魚を求めんに魚に代ふるに蛇を與へ、卵を求めんに蝎を與へんや、さらば汝等、惡しき者ながら善き賜物をその子等に與ふるを知る、そして天の父は求むるものに聖靈を賜はざらんや」

たゞ聖靈は神の我等に賜はる最後の御惠み、最大の賜物なるにより、神は決して之を輕々しく我等に下さらぬのである。

人間同志の間柄でも、一寸したものなら、簡單に無雜作に「俺にそれをくれないか」「よしやらう」と云ふ風に、貰つたりやつたりする。ところが高貴なものになると、そう簡單にやりとりはしない。第一相手方が充分にその物の價値を認め、第二に熱心に之を要求し、第三にやれば必ず相手方が大切に之を保持すると云ふ見當がつかねば與へないにきまつてゐる。神が私共に最後の御惠み、最大の賜物を下さるに當つては、それよりも更に愼重の態度をお取りになるのはわかり切つた事だ。

「聖なるものを大いに與ふるな、また眞珠を豚の前に投ぐるな、恐らくは足にて踏みつけ、向き反て汝等を嚙み破らん」

之は本當に御尤もの事である。

それで私共が、神から聖靈を戴く爲めには、先づ第一に、私共が聖靈の如何に貴いものであるかを如實に知る事が必要である。何物にも勝りて聖靈の貴いものである事がわかれば、その聖靈を戴くための故になら、何物をも擲つ覺悟の起るのが當然である。

「天國は畑に隱れたる寶の如し、人見出さば之を隱し置きて喜び行き、有てるものを悉く賣りて之を買ふなり、また天國は良き眞珠を求むる商人の如し、價高き眞珠一つを見出さば行きて有てる物を悉く賣りて之を買ふなり」

元々神は私共に、聖靈を與へんと待ち構へて居られるのである。與へたくてたまらないのである。たゞ我等にそれを戴くだけの覺悟、神の方から見れば、我等に之を與へるだけの資格のないがために、その覺悟、その資格の備はるのを待つて居られるのである。

我等にしてよく聖靈の如何に貴きものであるかを認識し、そうして之を得るが爲めには何物を犧牲に供するも辭せぬ大欲求、大念願を起すならば、神は必ず喜んで我等にその最後の御惠みであり、最大の賜物である處の聖靈をお與へ下さる事は、最も確實なるお約束であつて、一點、疑ひの餘地のないことである。お互に一日も早く、此の最後のお惠み、最大の賜物を得て意義あり價値ある人生を送り度いものである。

私共は祈る時、たゞベラ〳〵と口ぐせになつて居る言葉を口から出まかせに吐き出すような輕はずみの態度であつてはならぬ。最も敬虔なる態度をとつて、自らが語るよりも、より多く神に語つて戴くようにするのが本當に神を信ずるものゝ態度である。

神は常に私共に語つて居て下さる。我々が聖書を讀んで居る時に、我々が自らお祈りをして居る時に、人の祈りの座に連つて居る時に、働いて居る時に、他と話してゐる時に、道を歩いてゐる時に、寢てゐる時に、いつでも私共に語つて居て下さるのである。

ラヂオの放送局では、毎日色々の放送をつゞけて居るけれども、アンテナの裝置がないとその聲を聽きとる事が出來ない。神の御聲は、天下に充ち滿ちて居る。たゞ靈の耳を持ち、

之を聞くべく心構へして居る者のみが聞く事を得るのである。

私は、此頃、神の存在に關する議論の必要はなくなつて來た。たゞもうお祈りせずには居られぬ氣持になつて來た。

祈る時、私の心は平靜になる。

祈る時、私の力は加はつてくる。

祈る時、私の不安は消滅する。

祈る時、私は何んでも忍べる。

どんなに懷疑的の人の心にでも、今我が子が生きるか死ぬるかと云ふような非常時に當面すると、祈禱の衝動が頭を擡げる。カーライルはその友に與へた書簡の中に於て「友よ、祈禱は人の心靈に存する最も深き固有の感である」と言つてゐる。

我等は平常時に處する事、猶ほ非常時に於けるが如くありたいものだ。

私は今日迄祈る時、默禱の形式をとつて居たが、默禱では段々心が散亂していつて往々に

して妄想に陥る場合がある。言葉に表白して祈るようになつてから、祈る事が組織立ち、それだけ力の加はつてくるのを感じたのである。

次に自分一人で祈る時よりも、家族と共に祈る時の方が嚴肅味が加はるのを覺え、更に家族のものだけで祈る時よりも、他人に加はつて貰つて祈る時の方が一層嚴肅味の加はつたのを體驗する。

最も近しい河島夫人の御通夜に連つた。

人が死體となつて横はる時、その人は最も嚴肅なる存在となる。死によつて人の生命はより鮮かなものとなる。又死せる人を中心に座る時ほど我等の心の嚴肅になる事はない。我等はそう云ふ時に人生を最も深く考へることが出來る。

私はつく〴〵と人間の往生際の大切なる事を悟らせられた。老少は不定である。死はいつ迫つて來るかわからない。死がいつ來てもうろたへず立派に往生の素懷を遂ぐる事の出來るように我等は平素に於て死の準備をしておくことが必要である。

他の態度が我が氣に入る入らないなど言ふ時に、その人はまだ本當に救はれて居ない人である。眞に救はれて居る人ならば、他の我れに對する態度などは少しも問題にはならず、たゞ偏に他に對する自己の態度が他のつまづきになるようの事がないようにと只管に神に祈るのである。

私共は常により多く神と交はり、より少なく人と交はるべく心掛けねばならぬ。神と交はるよりも、より多く人と交はる時に、我等の心はゆがみ、我等の心は剛情になつて行く。

一番無駄のない生活、それは神の御旨によつてのみ行動する生活である。

我々は今日まで神を離れて生きて居つたが爲めに、どれだけ人を苦しめ又自らも苦しんで來た事かわからない。

希くば今後は、神の道を踏み行ふが爲めに、それだけぶり、餘計に苦しんで見たいものだ。

孔子の如き大聖は、千年に一人生れるか生れぬかわからぬ程の稀代の大聖人である。それ程の孔子が、三十にして立ち、四十にして惑はず、五十にして天命を知り、六十にして耳從ひ、七十にして心の欲する處に從つて矩を踰へずと言ふて居る。

世界の大聖である孔子の如きが、七十にして始めて達する事が出來るのである。考へてみると、幾度生を更へても、到底我等の力には覺束ない事である。

だから我々は、善き事をして神に救はれるのではない。神に救はれて善き事が出來るのである。

我々は今日迄、よい事をしようとつとめぬではなかつた。隨分つとめたものだ。けれども幾らつとめてもよい事が出來なかつたのだ。それが聖靈を戴くと、その善き事がすら〳〵と出來るようになるのである。（大正十五年七月）

九　地蟲は殼を脱け出たり

我等の靈眼未だ開けず、我等の靈智未だ働かざる內は、身中身邊に滿ち溢れる神の恩惠が少しもわからないから、見るもの聞くものが悉く疳癪の種であつて、心はいつも不平不滿で一ぱいになり、口は常につぶやき言ばかり言ふのである。たまさか神様にお祈りする時でも、たゞこうして下さい、あゝして下さい、とおねだりするばかりで、一言半句、感謝の言葉がないのである。

その時神様は慈愛あふるゝ御眼を以て我等を眺め、「我が惠み汝に足れり」と仰しやるのであるが、迷へるものにはそれが何の事やらわからず、そう云ふ神様の態度さへもがうらめしく思はれるのである。

けれども靈眼が一度開け、靈智が漸く働き出してくると、それに連れて計り知れぬ神の恩惠がわかり出してくるのである。

世には目の見へない人があるのに、自分には目が見へて有難い。世には耳の聞えない人があるのに、自分には耳が聞えて有難い。世には口の利けない人があるのに、自分には自由に口が利けて有難い。世には手足の不自由な人があるのに、自分は自由に歩行が出來、又自由に手を動かす事が出來て有難いといふことになる。

考へてもみよ。目の見えぬ人、耳の聞えぬ人、口の利けぬ人、手足が意のまゝにならぬ人々の不自由さを。然るに自分にはそれ等の一切の自由が與へられ惠まれて居る。思へば今こうして在る事、存在その物が既に無限の感謝である。之は決して當然の事ではない、實に大なる惠まれである。

朝、目が醒める。昨夜は何の思ひ煩ひもなくよく安眠する事が出來た、それがもう感謝である。一切の疲勞から解放されて、今朝も亦元氣よく起きあがる事が出來た、之れ又大なる感謝である。

仕事がなくて困つて居る人々があるといふのに、自分は體が幾つあつても足らぬほど忙しい、おゝそれは何と大きなお惠みであらう。

働きたくても體が弱くて働けぬ人があるのに、自分は幾らでも活動に堪へ得られる、おゝそれは何と云ふおめぐみであらう。

たゞにそれ等の善い事ばかりではなく、家庭のなやみ、事業の失敗、病氣、貧苦、我を非難するもの、攻擊するもの、信任を裏切るもの、恩を仇で返すもの、自分の力を以てどうする事も出來ぬ困つた問題の出現、之等神を信ぜないものには到底堪へ切れないような、厭ふべきいやな問題までもが、神を信ずる者には、すべて働いて益をなし、それあるが爲めに我はよく謙り下る事が出來、それあるがために我はよく人樣に同情する事が出來、それあるがために我はよく緊張した生活をする事が出來、それあるがために我はいよいよ神に近づく事が出來るのである。

神に愛されて、よき生活をして居る人は無論我のよきお手本であるが、神に背いて、淺間しき生活をして居る人までもが我にはよき反省資料として役立つのである。あるがまゝの狀態が、そのまゝ皆おめぐみであり、見るもの、聞くもの、一切が皆有難い事ばかりである。

ポーロが「我等をキリストの愛より離れしむる者は誰ぞ、患難か、苦難か、迫害か、飢か裸か、危險か、劍か――然れどすべてこれ等の事の中にありても、我等を愛したまふ者に賴り、勝ち得て餘りあり、我れ確く信ず、死も生命も、御使も、權威ある者も、今ある者も後あらん者も、力ある者も、高きも深きも、此の他の造られたるものも、我らの主キリストイエスにある神より我等を離れしむるを得ざることを」と言はれた心持がよく分る。

かんな屑は、忽ちにして燃えあがるが、又忽ちにして消えてしまふ。之に反して、ならや櫟のような、かたい薪は、容易に焚き付かないが、ついたが最後、いつまでも消へない。之と同じ樣に、單なる人間の感情の喜樂は、かんな屑の火のやうに、ほんの瞬間にして明滅してしまふ。時としてはその喜びは却つて悲しみにさへ變つて行く。然るに神に隨ひ、聖靈によつて躍り上る喜びは、滾々として盡きざる泉の如く、幹に連る枝の譬への通り、益々茂り榮へて行くのである。卽ち幹なる神の助けがあるが故である。

見よ、地虫は、今し殼から脫け出でた。やがて蟬となつて舞ひがるであらう。我等も舊き

我から脫け出でゝ、新らしき我となり、生の飛躍を行はうではないか。

信仰のない人には、一つ一つ破壞として働く力が、信仰ある人には、それが一つ一つ建設として働くのである。

暗より光りへの生活、肉より靈への生活、地より天への生活、人より神への生活、それは眞反對への方向變換であるから、今迄の生命觀、それから導かるゝ價値觀念からすると、驚くべき破壞であり、損失であるが、新らしく贏ち得た生命觀、それから導かるゝ價値觀念からすると、それが本當の建設となり利得となるのである。

「さきに我が益たりし事はキリストの爲めに損と思ふに至れり、然り、我はわが主キリスト・イエスを知る事の優れたる爲めに、凡ての物を損なりと思ひ、彼のために既に凡ての物を損せしが、之を塵芥の如く思ふ」

一切をお任せ申して、安心の出來る力が見えて來ないと入れぬ生活であるが、一度大決心を起して、この生活に入ると、もう世の中に何の不安も心配もなくなるのである。

信仰生活の極意は「死して復た生くる」ことだ。一度全く自己を棄て切つてしまふことだ

と謂はれる。

私も亦そうだと思ふ。たゞ玆で大いに考へねばならぬ事は、自己とは何を指すかである。

一個の人間が存在する限り「自己」なる意識は永久に存在する。自己意識の滅却、それは自己廢棄、自己滅亡を意味する。然し自己を棄てると云ふ事が、決して自己廢棄、自己滅亡であつてはならぬ。

信仰生活上、自己を棄てると云ふ事は、自己を中心とする一切の諸慾を棄てゝ、一々神の御旨に任せまつると云ふ事でなくてはならぬ。つまり自己中心の生活を棄てゝ、神中心の生活をすることが信仰生活の極意である。

神を中心とする生活ならば、神の造り給ふた世界を否定するのではなくして、却つてそれは神の造り給ふた其儘の世界、その儘の人間、その儘の自我を肯定するのである。だから自我慾のために轉倒した此の世を愛してはいけないのである。

世を棄てると云ひ、自己を棄てると云ふのは、此の意味に於てのみ正しいものである事を忘れてはならない。我々は遁世するのではなく、たゞ不當な慾を棄てればよいのである。

人間生活には幾つもの段階がある。その最低段階が官能の世界である。官能の世界とは、人間が肉體を中心として、其處から生ずる感覺的生活に耽溺する世界である。

尤も肉だとて、神の造り給ふたものである。肉自身は決して惡いのではない。從つて肉の慾を徹底的に否定すべきものでない事はきまつて居る。より高き生活に役立つ肉の正當なる慾求は無論肯定すべきものでなくてはならぬ。

たゞそれは、人間をより劣等なる動物の世界に結びつけて居る連鎖である。肉は人間になくてならぬ一つの機關ではあるが、ともすれば人間を惡に導く傾向を多分に備へて居る事を警戒しなければならぬ。

故に私がこゝで賤しめる處の肉慾とは、世間多くの人が、それを此上もなきものゝ如くに考へて、それがために夢中になつて居るあの劣慾、即ち肉體を中心として、其處から生ずる一切の感覺的生活を指すのである。「世と世の慾とは過ぎ行く」官能の世界、そこには何等永遠的の價値はないのである。我等はいつまでもこんな世界にまごついて居てはならぬ。

人間が、一番生き甲斐を感ずる時は、何物かに我がありッたけの力を打ち込んでかゝるほどの對象を持つた時である。緊張生活の極に於てなら、死ぬことさへも苦しくはない、寧ろ痛快である。

我々が、横綱の相撲、名優の演劇、エルマンのバイオリン、パブロバの舞踏などに接する時、云ふべからざる一種の快感を感ずるのは、我等の心が、彼等の緊張生活によつて刺戟せらるゝからである。

見てさへ、聞いてさへ、こんなにも快感を感ずるのだから、その緊張生活の當事者自身の快感は、更に一層のものでなくてはならぬ。お互に、何か一つ全肉全靈を打ちこんで悔いぬほどの對象を見出したいものである。

たゞこゝに心せねばならぬことはその對象が低級のものである時は我等の緊張生活が、永續しないことだ。低級なる對象でも、一時は強い緊張生活にはいれぬことはない、現に我等の左右には、低級なる對象に基づく緊張生活を營んでゐる人が澤山居る。けれども多くはその内に飽きてくる、疲れてくる。飽きが來、疲れがくる時に、我等の心はめつきりと衰へるのである。オ、心の衰へ、それは思ふてもいやなことだ。（大正十五年七月）

一〇　眞心を阻むもの

私共は、私共の持つて居る一番善き心、卽ちま心によつて生きるべきである。すべての人は、恐らく心の内にさう願つて居るに相違ない。然らばすべての人は、皆そのま心によつて生きて居るかと云ふに、さうではない。多くは却つてそのま心に背いた生活をして居るのである。心には願ひながら、實際はそれに背いた生活をして居る。それは心にもなき生活をして居るのである。

人間が心にもない生活をするのは、そこに、心のまゝに生きんとする我を妨げる何物かの力があるからである。

私共のま心に生きんとするのを妨ぐる力が二つある。一つは外から我を妨ぐる力であつて他は内から我を妨ぐる力である。

先づ始めに、外から我を妨ぐる力に就て考へて見やう。

我等が此世にある、夫はたゞ一人あるのではない。之を縦に見れば、上には父母あり祖父母あり、下には子あり孫がある。之を横に見れば、身内としては、妻あり兄弟あり親戚あり、他人としては、隣人あり友人がある。我等はそう云ふ人々と共に、社會的に生きて居るのである。それで我等のま心は、ともすれば、それ等の人のために妨げられ、歪められ、往々にして我等は心にもなき生活をするに至るのである。

「僕は本來酒はきらいだが、交際上止むを得ず飲むのだ」とか、又は「交際まけがして產を傾けた」など云ふことをよく聞くのは、皆其の例である。

弱い人間になると、何もかも悉く他から踏みにじられて、その間、少しも自己を生かし得ない人がある。何といふ無意義の存在であらう。だが、さう云ふ見易いものばかりでなくて人も自分も全く氣が附かないで居て、其實我が本心の生活を他から妨げられて居るのがある。例へば一世の風潮に動かされて、よく考へて見れば、大した意義も價値もない事のために浮き身をやつすが如きがそれである。

かつて吉田松陰先生は「大患の大患たるは、その大患たるを知らざるにあり」と云つたが、本當にそうだと思ふ。

現代人は極端に名利を追求する。私は之とても決して人間の深い〳〵內部生命の要求ではなくて、一世の惡風潮に刺戟せられた結果であると思ふ。例へば世間が軍人を讃美すると、忽ち軍人を志願し其の妻君を志望するものが殖へて來る。又世間が實業家を謳歌すると、實業家乃至實業家の妻君の志望者が殖へて來る。或は又世間が文藝々術家を尊重する樣になると、自分にその天分のあるとないとに拘らず、又自分に其の理解のあるとないとに拘らず、文藝々術家たらん事を志し、又はその妻君の志望者が殖へて來る。

おゝ！　それは何と云ふ淺ましい心の動き方であらう。

現代人は、極端に、華美、贅澤、虛榮の生活をして居る。それが爲めに一家は往々にして產を破り、一國は危く其の運命を傾けんとして居る。之なども畢竟は國民に、誰れが何と言はうがそんな事は構はない、自分は自分の信ずる處を行ふと云ふ强い信念がないからである

と思ふ。

道徳上の價値も、法律上の責任も、皆自由意思を前提として居る。この自由意思から生れ出でたる行爲にして始めて道徳的價値があり、この自由意思から發露した行爲にして、始めて法律上の責任が生じてくるのである。他から强制せられてやつた事は、何等の意義も、價値も責任もないのである。

遊戯と勤勞は、形の上から見れば兩者とも等しく筋肉を働かせて居る、而も子供等は遊戯は非常に喜ぶが勤勞はちよつとした事でもすぐ厭ふ。之はなぜだらう。それは遊戯の內面的、自發的なるに反し、勤勞は外面的、他律的であるからである。

奉仕生活も奴隷生活も、其の形の上からは、等しく共に己のためにあらず他のために盡す生活である。而も人は奉仕生活を光榮として、奴隷生活を屈辱とする。之はなぜだらう。それは奉仕生活の自ら進んで他のために盡すに反し、奴隷生活は餘儀なくされて、他のために

盡す屈從生活なるが故である。

自分が食べたくて、喜んで食べてこそ御馳走だ。然るにいやな時に無理强いに食べさせられるなら、いかなる山海の珍味も決して御馳走ではない。

同じく月を見ても、花を見ても、芝居を見物しても、自分の內なる欲求から出てこそ愉快であるが、自分の一向氣の進まない時に、他から强いて驅り立てられて出て行つたのでは少しも愉快ではない。

かくの如く我れ自らが本然の欲求に從つて動いてこそ、本當の人間である。之に反して他からの强制によつて、始めて動くが如きは、人間と云ふよりも寧ろ人形と云ふべきである。

一から十まで他から餘儀なくされて動く、それは何と云ふ苦しい、そして屈辱の人生であらう。我等は、一日も早くかゝる外敵權威の壓迫から逃れて、自己本然の欲求に生きたいも

のである。

次に內から我を妨ぐる力について考へて見たい。

我れま心に生きんことを希ふ時に、それを內から妨ぐる力、それは我等の利己、我儘の心である。

ま心と利己我儘の心とは、地球で申せば南極と北極と云ふ樣に、アンチポード（反對兩極）の關係にあるのである。

それで利己我儘の心の至つて强い人になると、ま心はあるかなきかの頗る弱い狀態になり、ま心の權威の極めて旺盛なる人になると、利己我儘の心は殆ど全く無くなつてしまふ。

人間は誰れでも始めは利己我儘の强いものである。「敎へなくんば禽獸に近し」と申すが人間の利己我儘から出る慘忍性は、畜生などに比べると、遙に深刻味を帶びて居ると云はれる。此の利己、我儘の心の旺盛なる中は、我々のま心、卽ち眞の貴い人間性は、埋れ罩めしとばりの中に、深い眠りを續けて居るのである。

私は今こゝに、良心起源論などを述べやうとは思はぬが、我等のま心は、我等が相當の期間社會生活を營み、かなり多くの生活體驗を重ねて後に表はれて來るものである。

性質上、特別に利己我儘の强い人、又は境遇上誰れも頭の抑へ手がなく、幾らでも利己我儘をのさばらす樣の人になると、幾つになつてもその利己我儘が矯められず、子供のまゝ大きくなつた樣の人がある。さう云ふ人は憎むよりはむしろ氣の毒な人である。

獅子は百獸の王である。外から來る敵ならば、どんな强敵にでも打ち勝てる身であつても、蚤、虱、ダニの如く、自分の體の中に巣喰つて居る、自分を害ふ所謂獅子身中の蟲に逢つては、之をどうする事も出來ず、輾轉反惻、それは實にいぢらしいほど藻掻き苦しむのである。所がそれよりも、もう一層始末に了へぬのは、肉體よりももつと深い、我々の心の中に骨がウミになつて居て、我を蝕み我を妨ぐる、その力である。王陽明は之を心中の賊と呼び、「山中の賊を討ずるは易く、心中の賊を討ずるは難し」と歎聲を洩らされて居る。

人は始めは此の二つの力、即ち外から我を妨ぐる外來の力、及び内から我を妨ぐる内攻の力がどの位強いものであるかを知らないのである。なぜならば、我等は始めは少しも此の二つの力に對抗しようとせず、たゞこの二力の引きづるがまゝに引きづられて居るからだ。

所が漸く自我に目覺め、眞我に醒めて、その自我、その眞我を生かさうとする時に、そこに始めて此の二つの對抗力のいかに頑强であるかを知るのである。

この自我、この眞我を生かし拔かうとする力と、さうはさせずと之を妨ぐる力とが五分五分になつた時が、我等が自己分裂の悲哀を感ずる時である。又人生の苦しい闘ひの始まるのも此時である。その闘ひでは、實に深刻な血みどろの闘ひである。

「人生、學を知る、是れ憂の始め」は眞理だ。けれども我等は、此の闘ひなしには貴い人生を贏ち得ることが出來ないのである。この闘ひは我等が本當に人間らしい人間になるためにどうしても免れることの出來ない闘ひである。而もこの闘ひは、一朝一夕に片附くべき簡單なる闘ひではない。と云つて、人間は、いつまでもこんな闘ひに堪へられる譯のものではない。折角こゝ迄辿りつゞけて、又再び、その他律の生活に引き戻されることは如何にも惜しい、どうしても此の闘ひに打勝たねばならぬ。而も自分にはもう之れ以上の力は出せない、この時、始めて人間は神佛にすがる。「我が神、我が神、何ぞ我を捨て給ふや」ここに信仰生活がある。

信仰生活とは神に歸一し、内包的に神と一體不離になり、神の力即ち我が力、所謂神通力を以て奮ひ起つ生活である。

神なしには此の世はあまりに淋しい。神なしには生きるに甲斐なき人生である。

かう云ふと、人はすぐ、神は果してあるだらうか、もしあるとしたら、どんなものだらうとか、居るならどこに居るだらうと云ふやうなことを言ふが、そんな事を云ふ時に、その人は、まだ本氣でない、眞劍でない、眞面目でない。

人間が本當に本氣になる時、本當に眞劍になる時、本當に眞面目になる時に、理屈は彼の頭から消へ去つて、神はあらうかなからうか等と詮議立てする暇はなく、たゞもう神にすが

り、神に祈らずには居られなくなつて來る。

太平洋の眞ん中で、我が乘る船が引つくり返り、辛うじて板子一枚に取りすがつた時、自力が果してどれだけ役に立つものか、いくら泳ぎの名手だと言つた處で、まさか太平洋を泳ぎ拔くわけには行くまい。さう云ふせつぱ詰つた時、神は果して有るものだらうか、無いものだらうか、もし有るなら神にすがつて見やうと云ふやうの、そんな呑ん氣な間の拔けた考への起る筈がない、かゝる時、人間は、神に祈らずには居られないのである。

私は今、明治天皇の御病ひが刻々と重らせ給ひし時の光景を思ひ出す。六千萬の陛下の赤子は、悉く神佛の加護を祈願し、天神地祇に御快癒を祈願し奉つたではなかつたか。

私に一人の叔父がある。彼は平生無神論者であつた。然るに彼の愛子が一度び中耳炎の重いのを煩つた。而も手術が少し手おくれ、醫學上からはもう生くべき望みが絶へてしまつた。叔父は平生大酒飲みであつたが、我子の病氣平癒を祈るためには、斷然その好きな酒を絶つた。すると叔母は、女の生命と云はれる綠の黑髮惜し氣もなくブツつり切つて、只管に神佛

に祈願をこめる。外聞とか外見とか、そんなことに頓着なく、一心不亂に祈り求むる光景は鬼神もその心を動かさずには居られぬ程であつた。

詮方つくれども尙ほ望みは失はぬのが信仰生活である。詮方盡きた時にすがるべき神のない人は自暴自棄になる。

保元平治の昔、源平屋島の戰ひに、一日平家方から一艘の船が出て、舳先に長い竿を立てゝ扇を附けられてあつて、一人の官女が其の下に立てゐた。見ればその竿の先には日の丸の扇子が附けられてあつて、一人の官女が其の下に立ち、陸なる源氏に、此の扇子を射落すほどの名人があるかとの挑戰である。源氏の大將義經は、那須の與一を指名する。與一は一應は辭退したが、君命もだし難く、遂に覺悟を決めて馬を浪間に乘り込む、源氏も平家も鳴りを靜めて之を眺める。彼はその責任の重きに戰き、弓矢とつたるまゝ暫し瞑目、南無八幡大菩薩と祈願をこめ、滿月の如く引きしぼりて、ひよいと射て放つ。不思議！　其の矢は見事に的中し、扇子は波上に射落された。

又東郷大將は日露の役、日本海の大海戰に當り、「皇國の興廢此の一戰にあり」と感じた時、彼は眞に天祐を祈らずには居られなかつた。故に大將は、勝つた時には少しも自分の力で勝つたとは思はず、「天祐による」と云つて居る。

人は誰れでも、その責任の重きを感ずる時、神佛に祈る、祈らずには居られぬのである。

又人間が、何事にもあれ、本氣になり、眞劍になる時は、覺へず知らず信仰生活に入るものである。その技神に入るとか、入神の技など云ふのは皆その消息を語つた言葉である。故に私は、信仰生活とは、人間の最高最勝の生活であると主張するのである。

人間は絶對絶命の時、もう之れ以上自力の出しやうがない時、而もその望みを捨てることの出來ない時、又己が責任の重大なるを痛感する時、我が天職使命に眞劍になる時、斯の如き時には何人も神佛にすがらずには居られぬ心持がある。

人間の眞面目、本氣、眞劍が最高調に達する時、そこに頭を擡げて來るのが宗教である。

宗教は一人二人の人が方便的に思ひついてこしらへたものではなくて、人間本具の精神から生れたものである。人間性に根據を有するものである。

天の命之れを性と云ふ、性に從ふ之を道と云ふ、道は必ず性に從つて立てらるべきものである。若しも人間に、宗教心がないならば、人間を宗教的に導くと云ふことは、畢竟するに徒勞である、けれども人間には、誰れにでも慥かに宗教心がある。あるが故にあらしめねばならないのだ。

凡人が非常時に於てのみ出すその心得を、偉人は平生時に於て出す。そこに偉人と凡人との差異がある。

凡人は逆境に遭遇するときは本氣になるが、順境になると忽ちだらける。

例へば我が子が生きるか死ぬるかと云ふやうの時には、好きな酒でも何んでも斷つて神佛にすがるが、咽喉元過ぐれば暑さ忘るゝ、その内に、あの時斷つたのは日本酒だけで、ビールは其中に入れた覺へはないなどと云つて、ビールを飲み始め、いつしか日本酒までものみ

出してくると云つた調子である。

人間非常時の心持、それが正念である。その正念を何處までも持ち續ける正念相續、それが卽ち信仰生活である。

實際順境と云ひ逆境と云つた處で、それがどれだけの差でもない。家內中皆達者なのを順境と云ふのか、然らばその家庭の一人が、熱が二度か三度上つて見やうなら逆境になるではないか。我等はつねに「治に居て亂を忘れ」てはならぬ。食ふに困らぬほどの財產を持つて居るのを順境と考へるが、若し經濟界の事情が少しく動搖して、株の値でも下がらうものなら金持の頭は貧亡人以上ウヅキ出す。思へば順境と云ふものも便りないものではないか。つまり順境と云ひ、逆境と云ふも、畢竟掌の表裏を返すが如きものである。だから道元禪師はつねに、「平生心是道」と戒められた。

人生行路難、山にあらず、河にあらず、人情反覆の間にあり。世に人間の心ほど便りないものはない。

そんな便りない人間の心などを相手取つて、それに調子を合せ迎合せんと苦心して居れば我等の魂はいつまでたつても落附く事が出來ず、常に小心翼々、おびへてのみ居らねばならぬ。

人生悲哀の最も深刻なるものは、夫婦、親子、兄弟と云ふが如き、切つても切れない身內の者同志の間に何等かの間隙、何等かの衝突があつて、二人の間がしつくり合はない時である。かゝる時、そのしつくりしない點を取つてしまへば、悲しみは自づと影を潛め、玆に始めて眞人生が現はれてくるのである。

そういふ時に、人は一應、全く自分を抂屈して、他をのんびり生かしてやらうかとも思ふことがある。けれども何處までも附け上つて來る他を忍ぶといふ事は、容易の事でない。

神を持たない二人の人間と人間との接觸生活は、衝突に終らなければ、必ず妥協に陷る。妥協による平和は心からなる平和ではなく、一方か、又は双方の抂屈に基く平和か、然らざれば双方の共通點だけに生きる生活である。共通點とは、之を數學的にいへば、最大公約數

のことである。最大公約數は常に双方の何れよりも小さい數であつて、双方の何れよりも大きい事はあり得ない數である。

故に、妥協生活は、お互に他を引下げる生活であつて、お互に他を引き上げる生活ではない。

共同生活は量的には我を大きくする生活であるが、質的には我を小さくする生活である。

之に反して、この二人の間に神を持つことになると、それは全く趣きが變つて來る。我等は決して直接お互に調子を合せやうとせずに、各々が先づ神と自分の調子を合はせる、さうすれば同じものに等しきものは相等しで、自然とお互の調子まで合つて來る。所謂殊勝を求めねど殊勝自ら至るのである。

數學的に云へば、神は公倍數の無限に大きなものである。だから神によつて一致する時にお互は少しも自己を害ふことなしに、他と一致することが出來る。お互に他を引上げる生活、それは神を持つ信仰生活である。

人間は、眞面目になればなるだけ、無我になり、愛になる。我等の眞面目が最高調に達する時、我等の衷に神の愛が現はれてくる。

我等は理屈から行つて神に達することは出來ぬ、我等の眞面目を段々高めて行つて愛に達し、その愛から神に行く事が出來るのである。

聖書に「愛は神より生ず、おほよそ愛ある者は神より生れ、神を知るなり、愛なきものは神を知らず、神は愛すればなり」と、實に神に至るの道は愛である。

人を恨むのは人を恃んだからである。

世を呪ふは世を相手どつたからである。夢にも人を恃みとする勿れ。忘れても世を相手にする勿れ。

かつて西鄕隆盛は「人を相手にせず天を相手にせよ」と言つたが、この一言は、自分が期待に裏切られてみて、初めて眞理であることを知る。（大正十五年八月）

二　一切爲し能ふとの確信

「汝らが神に向ひて確信する所は是れなり、卽ち御心にかなふ事を求めば必ず聽き給ふ」

「汝らの得ざるは求めざるによりてなり、汝ら求めて得ざるは慾のために費さんとて妄りに求むるが故なり」

「神を信ぜよ、誠に汝らに告ぐ、人若しこの山に移りて海に入れと言ふとも、其言ふ所必ず成るべしと信じて心に疑はずばその如く成るべし――、この故に汝らに告ぐ、凡て祈りて願ふ事はすでに得たりと信ぜよ、然らば得べし」

今までは自分の小さな智慧と能力とからのみ割り出して、此の事ならば出來る、此の事は出來ないと云ふ風にばかり考へて居たので、小さな自分が尙ほ萎縮してしまつて居たが、此の頃では、之は人には能はねども、神はすべての事をなし得るなり、自分に出來ない事でも神に出來ない事は何にもない。自分の願ひが神のみ心に叶ふものである以上、神は必ず聞いて下さると信ずる事が出來るやうになつた。

正しき願ひは必ず通る、今直ぐ聞いて下さるか、或はずつと後に聞いて下さるか、それは神の御考へ一つだ。自分はたゞ神は早晩必ず正しき願ひは聞いて下さることを信ずればいゝのだ。

かく信じて生きる時、我等の心は平安になる。

かく信じて生きる時、我等の心は感謝に滿つる。

かく信じて生きる時、我等の前途は希望に輝く。

眞に我等を救ふ者は我等の信仰である。

おゝ神よ、我れ信ず、我が信の尙ほ薄きを助け給へ。

夜寢る時も神を思ひ、朝起きる時も神を思ひ、食ふにも飲むにも働くにも憩ふにもすべて神を思ふ。かくて私は、二六時中、神を思はぬ時とてはなくなつて來た。神なしには私はもう生きて居られぬ。神こそは實に我が生命である。

神と交はり、神と通じ、神と一體になつてやつた事に何一つ失敗はなく、又何一つ後悔はない。

曾て私が、物質的に打撃を受けた時の事を考へて見るに、それは皆私が自己を中心として自己のために生きんとした時、卽ち神を離れ神に背いた時である。

神による恩惠と平安以外に、眞の恩惠と平安とはない。人による恩惠と平安は、それが神からの延長としての人から來る場合には眞にうれしいものであるが、神と沒交渉の人から來たものである時には、我等は決してそれを喜んではならぬ。なぜならば、神と沒交渉の人から來たものは、多くの場合、忽ちにして失はれるものであるからである。そうして一度來て失はれる場合には、始めから來なかつた場合よりも辛い思ひのするものである。だから我等は、神と沒交渉に、單に人から來た恩惠と平安とは、始めから之を貴いもの、うれしいものと思はないやうにする事が何より大事の心掛けである。

神と自分とさへあれば、少しも淋しいと思はず、幸福に生きて行ける修行こそは大切の修行である。

人がどんな仕向けをしても、それによつて我が心を暗くされることのない樣に心掛けて居るべきである。

「造家者らの棄てたる石は、之ぞ隅の首石となれる、之れ主によりて成れるにて我等の目には奇しきなり」

人間の打算と神樣の打算とは違ふ。

曾ては或る出來事のために、惱懊苦悶の幾夜かを重ねた事さへある。だが今はそれと同じやうの出來事が起つて來ても、何等の苦惱もなく平然としてそれを受けることが出來るやうになつて來た。我は今更の如く信仰の貴さ有難さを思はざるを得ない。

天と地と海と、その中の一切のものを內包的に我に統一し、我れ卽一切、一切卽我れの生活を送り、天地の神を、ア、父よと呼ぶにふさはしき心持、我と神とが渾一體となつて生き我を見しものは卽ち父を見しものなりと叫び得らるゝ生活、オ、それは、何と云ふ素晴しい生活であらう。此の人の前にひれ伏す我は、それを無上の光榮とこそ感ずれ、何も恥かしいことゝは思はぬ。

私は性來極めて理屈つぽい人間であつた。すべての事を皆理屈攻めに考へて、理論の筋道が通らぬことは到底之を信じられない人間であつた。

それが一切理屈を超越して、信仰生活へは入ることになつた。理論の上から言へばかなり理屈に合はない事があつても、それが少しも私の信仰生活の邪魔にはならないようになつて來た。すべてがそのまゝ無條件で信じられるようになつて來た。此の新らしき世界は、一切が信で組み立てられて居る世界である。「汝の信、汝を救ふ」疑へば此の世界は解體する。國亡びて山河あり、オヽそれは何と云ふ淋しい世界であらう。私には、もう、信ずるより外に生きる道がなくなつたのである。

理屈で行ける限りは理屈で行くのもいゝ。けれども人生を本當に眞面目に考へる人であるならば、遂には必ず信仰生活へやつて來る。

人がどの位自分を苦しめ惱ますことが出來るものか、そうして自分がどの位それに堪へ得られるものか、時々は實地に之を體驗して見るのも必要な修行だ。

人がどんな仕向けをして來ようとも、自分の爲の故にそれを憤ると云ふことは一生したくないことだ。それは恥づべき私情私憤である。但し先方を愛するが爲めの故になら、時に應じて或は靜かに、或は劇しく叱つてやるのもいゝ。

子供が惡い癖を見せる。それを叱らうとする。而してその子供の惡癖が、自己又は妻の缺點の遺傳又は反映である事を思ひついた場合、私は一人密室に入つて、神と子供との前に泣いて許しを乞ふより外にその道を知らないのである。叱ると云ふことは輕々しく出來ることではない。

夫婦でもそうだ。それが神による愛から導かれていつて二人が覺へず一つに溶け合ふと云ふから貴いが、たゞ單に性的衝動のためにのみ二人が一緒に結びつき、喧嘩しながら子供ばかりよく生む。それが相互冒瀆だ。思ふても恥かしい事である。

自分に一つの性格上の缺點があり、それに氣がついて如何にもしてそれを矯正せんとして居る時に、自分と同じ樣の欠點を持つて、而もその人がそれを氣がついて居らぬのを見る時に、我々はそれを憐れむのが本當であるのに、それを憐むことが出來なくて、却てそれを惡むに至る。その人をにくむ限りその人の缺點を指摘する資格はない。我等がその人の缺點を指摘して、その人の反省を促すためには、我々はその人を本當に愛し、その人のためにその

缺點を惜しむ心からでなくてはならぬ。それが自己に不愉快だから、不都合だからと云ふのでは、餘りに勝手すぎる。そんな勝手な叱言を言つて見た所で　その人がそれを氣持よく受け容れてくれる筈がない。

吾々の生存目的はたゞ神のみ旨を行ふにある。

神を離れて私のために謀ること、それは神への反逆である。神への反逆、それが一切罪惡の源である。罪の値ひは死、神に反逆するものは早いか晩いか遂には必ず亡ぼされる。この事はもう疑ふ餘地がない。

「それ信仰は望む所を確信し、見ぬ物を眞實とするなり」

「汝は我を見しによりて信じたり、見ずして信ずる者は幸ひなり」（大正十五年九月）

三　愛の先驅者

人間の愛の中で、戀愛は強い愛ではあるが、それは餘りにも根強く性慾に基調をもつが爲めに、充分なる精神化が行はれにくい。そこにはまだ、多分に不純分子があつて、お互に相手方の幸福よりも、より多く自己の幸福を考へて居るのである。

人間の愛の中で、稍々純粹に近いものを求むれば、それは親の子に對する愛であらう。殊に母親の子に對する愛は、殆ど求むるなきに近い、實に貴いものがある。

それは十數年前のことであつたが、東京在に母一人娘一人といふ極めて貧しい母子があつた。彼等母子は賃機織をして心細くもその日〳〵の暮しを立てゝ居た。處がその娘が、或男に誘惑されて、母を見捨て、遂に家出をしてしまつた。取り殘された母親は、一人、泣く泣く淋しい生活を續けて居た。他人から見れば年老いて何等望みのない生活であつたが、でも自分の心の内には微ながらも一つの望みがあつた、それはその中にはきつと娘が歸つて來る

と云ふ望みであつた。たゞその淡い望みに僅かに心を慰められて居つた。

娘は其の後、七八年も放浪の生活をつゞけて居たが、遂に男に見捨てられてしまつた。その時彼の女の心に甦つて來たものは懐しき故郷とそこに居殘る母とであつた。一度び故郷を思ひ、背ける母のことを思ふと、歸心矢の如く、覺えず遂に故郷をさして歸つて來たのである。

彼の女が我家の軒に立つたのは夜の十二時過ぎであつた。見ると家の中からは、薄暗い、微な光りがさしてゐて、神か佛に祈り念ずる母の聲さへも聞こへて來た。彼女の心は沸き立つた。少しでも隙間を大きくして、もつと〳〵中の樣子を覗かんものとの一念に燃え、思はず手を戸にかけると、鍵がかけてあるとばかり思つた戸は、鍵がかけられてなかつたので、すぐガラ〳〵と開いてしまつた。すると不思議や、中からお母さんの聲がして、娘の名を呼びつゝ「清ちやんぢやないかへ」と立つて出て來た。

母にあはす顏もない娘ではあつたが、今はなつかしさ、申譯なさに胸迫つて、思はず駈け

寄り二人はひしと抱き合つて泣くより外に言葉は出なかつた。だが餘りにも劇的なこの場面に、母はまた夢ではないかと訝つて居る、すると暫らくして、涙の顏をあげた娘が、「お母樣！　どうして今夜に限り戸へ鍵をかけてなかつたですか、そうして戸が開いた刹那に、どうしてそれが私だと云ふことを知つたですか？」と訪ねると、老母は眼をしばたゝきながら、「娘よ、お前が出かけたその晩から今夜まで、母はお前を待たぬ夜とてはなかつたのだよ。たゞの一晩も戸に鍵をかけたことはなかつたのだよ。ハラ〳〵と木の葉を吹きつける風の音にも、コツ〳〵と敲く水鷄の音にも、若しやそれがお前ぢやあるまいかと、俺は幾度空しく足を戸口に運んだ事だつたらう。寢ても醒めても忘れ得なかつたその娘が、今夜こそは本當に歸つて來てくれたのだ。オ、清ちやん！　本當によく歸つて來てくれたね」と過去の不義不實は露ほども考へず、たゞ嬉しさに母は又してもよゝと泣きに泣いた。遂に不心得の娘も、この溫かい母親の愛の涙に潔められ、遂に前非を悔ひて救はれたのであつた。

人間の愛の中で、最も貴く、最も深いもの、それは母性の愛である。けれども悲しいかな母の愛は、たゞ我が子にだけの愛である。我が子の糞小便ならばそれを少しも穢いとは思は

ぬが、隣りの子供のは臭くてやり切れぬ、我が子なら目の中に入れても痛くはないが、隣りの餓鬼はうるさくて仕方がないと云ふのが親の愛である。

かくの如く親の愛は相當に純でもあり、又深くもあるが、横に幅の足りない愛である。強烈ではあるが變り易くして且つ不純の男女の戀愛に永續性を與へ、且つ之を極度まで淨め、かなり純粹でもあり、又かなり深みもあるが、たゞ幅が足りないといふ親の愛を縱に横に無限に擴大していつたもの、それが卽ち神の愛である。

天の父は、その太陽を、惡しきものゝ上にも、亦よきものゝ上にも等しく昇らせ、露しの雨を、正しきものにも、正しからぬものにも降らせ給ふのである。

神が私共を可愛がつて下さるのは、私共が先づ神を御慕ひしたからではない。私共は事毎に神に背くことばかりをなし、事毎に神のみ心を痛め奉つて居るのに、神はそれにもお腹立なく、それをも御見捨てなく、神の方から先づ私共を可愛がつて下さるのである。

それでは我等の何處かに、神の意を受くるに値ひするような、美しいもの、可愛らしいものがあるのかと云ふに、そうではない。我等の姿は、限りなく醜いものであり、我等の心は限りなく汚いものである。さればこそ、神様は、如何にもして、之を美しいもの、之を清い

ものに作り代へんが爲めに千々に心を碎いて下さるのである。

「慈悲の目に惡しと見ゆる者はなし足らぬ者こそ尙ほ可愛けれ」

「健康なる者は醫者を要せず、我が來りしは罪人のためなり」

とまで仰しやつて下さる。オ、それは何と云ふ深い、廣い、高い、至れり盡せる御愛であらうか。もし此の愛によつても尙ほ救はれぬ人間があるならば、彼はもう永久に亡びの子である。それは救はるべき見込の立たぬものと云はねばならぬ。

神の最も喜び給ふのは、碎けた心である。碎けた心とは、宏大無邊の神の御愛に打たれ、罪の自覺が出來て、厚顏、無恥、忘恩、剛情、傲慢の我が心が中からくづれ、泣いて神の御前にひれ伏し、罪の赦しを乞はずには居られぬようになつたその心である。心が碎けてくると、神様や人間の有り難みがよくわかつてくる。

人間が果して救はれて居るか否か、又その救はれて居る程度はどの位かは感謝の念をバロメーターとして之をはかる事が出來る。心が常に不平不滿で一杯になつて居て、ともすればつぶやき、ともすれば小言を言ふような人は、明かに未だ救はれて居ない人である。

眞によく救はれて居る人の心は、感謝の念で一はいであるがために、彼には、何を見ても聞いても、何をしてもされても、又いかなる事が起つて來ても、それが有難くて堪まらないのである。

懺悔の涙、感謝の念、是れなん、實に愛の先驅である。畜類尙ほ恩を報ず、人類いかでか恩を知らざらん、その報謝の精神は、やがて愛の實行となつて動き出すのである。

人生意氣に感ず、功名また誰れか論ぜん、士は己れを知るものゝために死す、人その友のために死す、之より大なる愛はないのである。

かく導かれ來つて、ヨハネ傳第十五章の九節より十二節までを讀んでみると、悉くが涙である。

「父の我を愛し給ひし如く、我も汝らを愛したり、我が愛に居れ、汝ら若しわが誡命をまもらば、我が愛に居らん、我れ我が父の誡命を守りてその愛に居る如し。

我これらの事を悟りたるは、我が喜悅の汝らに在り、かつ汝らの喜悅の滿たされん爲めなり。

我が誡命は是れなり、わが汝らを愛せし如く互に相愛せよ

人その友のために己の生命を棄つる、之より大なる愛はなし」

讀みもて行く內に、神の愛我が身に迫り、我が心は今言ふべからざる喜悅を以て滿ち溢るゝのである。

そうして私は、こゝに道德的修行と宗敎的修行との間に、一とつの著るしき相違のあつて存することを見出すのである。（大正十五年十月）

一三　大いなる生命の所在

我等は此悠久なる天地に只の一度切りしか此の生を寄することが出來ないのである。この身今生に於て度せずんば更に何れの處に於てか度せん、たゞの一度切りなる生活であることを知らば、此の生活をして、出來るだけ善美なる、出來るだけ大きく、且つ力強いものたらしめたいと云ふのが、萬人共通の願求でなくてはならぬ。

どうしたらば我等は、此の生涯をして、しかく善美なる、しかく大きく且つ力強きものたらしむることが出來るであらうか。それが爲めに最も大切なることは、我等が我等の心の裏に、驚くべき力の伏在して居ることを確信することである。

クリストを見よ、彼は天と地と海と、その中のすべてのものを內抱的に統一して、我卽一切、一切卽我の生活を送り、天地の造り主、萬物の維持者である神を我が父と呼び奉り、「我を見し者は卽ち父を見しものなり」と宣言して居るではないか。

釋迦を見よ、彼は右手に天を、左手に地を指し、「天上天下唯我獨尊」天が下、地の上に於て一番尊いものは我れなりとの心からなる感想を發表して居るではないか。

次に孔子を見よ。彼は「天德を我に生ず」と喝破して居るではないか。更に親鸞に聞けば彼は「彌陀の五法思惟の願をよくよく安んずれば親鸞一人の爲めなりけり」と歎じて居り、更に日蓮に聞けば、彼は「我れ日本の柱とならん、我れ日本の眼目とならん、誓ひし願破るべからず」と叫んで居る。

かくの如く偉人と云ふ偉人、大聖と云ふ大聖は、何れも皆、驚くべき大自然と大信念に生きて居る。と言ふよりは、かくの如き驚くべき大自覺と大信念とによつて生きて居たればこそ、あゝ言ふ偉大なる生活が送れたのだと言ふ方が適切の言ひ方である。

然るに現代人の多くは「俺はもうこれだけの人間だ」と、あまりにも情ないほど、自分で自分を卑下して居る。「あれはあれだけの人間だ」と互に他の尊嚴を瀆し合つて居る。自己評價は自己暗示である。我等は先づ、此の意氣地のない自己暗示を打ち破つて立ちあがる必要がある。

哲學界の第一人者であるカントは、かつて次ぎのやうに謂つて居る。

「此の世の中に、眞に驚歎に値ひするものが二つある。一つは、上なる星の輝く天空の廣さであつて、他は衷なる心の何處まで伸びるかわからぬ精神的可能力である」

と、本當にそうである。

諸君！　試みに晴れたる夜、あの天空を仰いでその廣さを想像して見たまへ、光の速力は一秒時間に三億メートルである。然るにあの星の中には、その光が我地球に達するのに何年、何十年、何百年とかゝるのさへもある。而もまだそれより遙に遠い遠い星があつて存するとのことだ。どこまでいつても果てしのないのが天空の廣さである。天の高さは究むべからず、而も心はその上に出る。地の厚さは測るべからず、而も心はその下に行く。眞に驚歎に値するものはたしかに此の二つである。

けれども更によく考へて見ると、此の二つのものは結局一つである、内なる心の精神的可能力があればこそ、上なる星の輝く天空の廣さがあるのである。それゆゑに、内なる心の精神的可能さがどの位廣いものかはわかる筈がない。

私は曾て綱島梁川先生の書いたものを讀んで、「尤も深い主觀は同時に客觀であり、最も強い要求は同時に實在である」と云ふ處に至つて非常に強い共鳴を感じ、暫し胸の高鳴りを禁ずることが出來なかつた。又中江藤樹先生は「我は小體の宇宙にして、宇宙は大體の我である」と觀て居られた。

オイケンが、人間は宇宙の種子であると言つたのは更に適切だ。よく考へてみれば世に種子ほど不思議のものはない。それは極めて小さき一粒の種子であるが、之に時と處とを與ふれば、やがて亭々天を凌ぐやうな大木となり、更に又鬱蒼たる森林にもなるのである。人間は宇宙の種子だ、だから人間の中には眞も美も聖も、苟くも宇宙にありとあらゆる一切のものは悉くこの六尺足らずの人間の中に包含されて居るのである。

だから之に機會を與へ、動機を貸し、方法を以てするならば、如何なるものでも人間の中から導き出すことが出來るのである。

平生は綺羅にも堪へないやうな婦人が、それ火事だ！　それ大水だ！　と云ふ時には、病

める親、傷つける夫をやす〳〵と運び出す。又後から追手に迫られるやうの時には、平生は思ひもよらぬやうな高い崖から向ふの岸へヒラリと飛び越すことが出來る。

これは關東大震災の時の話であつたが、靜岡縣の伊東の町は震源地に最も近かつたので、東京などより遙に大きな地震であつた。あらかたの家は皆つぶれ、而も海嘯の爲めに町半分は漂はれてしまつたのである。私の家族は、その時、その嘯海でさらわれたすぐ間際の或る別莊を借りて居たのである。私は例によつて旅行して居つて、家族と共には居なかつた。折から家内は姙娠中で、しかもリューマチスで手足不自由の老母と、いとけなき三人の子供とをかゝへて居た。一方は海、左右は瓦が落ちて建物の倒壞する恐れさへもある。で逃げ口はたゞ一方だ、而もそこには自分の方の生垣と、お隣りの方の生垣とが二重になつて居る。そこを突破するより外に逃げ道がない。そこで家内は年よりを負ひ、女中さんは子供を背負ひ、自分であるける二人の子供を引き連れて、生垣から逃れたのである。

私が、旅行先きから家に引ッかへしたのは、そのことあつて六日目の夜中であつた。そして當時の模樣をくわしく聞いて、こゝから逃れ出たのだといふ生垣の處を私が出やうと思つても、それはやす〳〵とは出られない、そこを、手足不自由の老婆を背負ひ、子供をおぶさつたりして、何物の障害もない處を出て行く樣にぬけていつたのであつた。驚くべきことである。けれどもかくの如きは、まだ〳〵何でもない例で、その時に多くの人々が表はした不思議な智慧と力とは、今こゝで皆樣にお話して見た處で、それは造り話だ、そんなことが人間に出來るものかと思はれるやうなことばかりであつた。

以上は天災地變による一般的の一時的なる能力の表はれであるが、更に個々の場合に於ける個々の人に就てみても、同樣に驚くべきものがある。

私の妻の姉は、四人の子供をかゝへて夫に死に別れたのである。義兄の病中私も屢々見舞にいつたが、義姉の看病は實に至れり盡せるものであつた。人間もあれ程までに看てもらへば、死んでも憾みはないなと思はれるほどの看病であつた。そんなことで財產もあらかたみなつかひ果してしまつた。遂に姉は無一文で四人を抱へることになつた。「女は弱し、されども母は强し」絕對境に立つと、そこに絕對力が頭をもたげてくる。

姉は、今迄若干の經驗あるを幸ひ、女に相應しき勞働として養蜂を選んだ。あそび半分の養蜂ではない、之によつてたゞ家族の口を過ごせばよいのでもない、子供等四人の敎育費を儲け出さねばならぬ。姉は寢てもさめても蜂のことにのみ苦心し努力して居る。夢を見ても養蜂以外の夢は見ぬとの話であつた。

かくていろ〳〵の困難も無論あつたが、それを悉く切りぬけてしまつた。一番上の女の子は女學校を優等で卒業して專門學校に進み、今では月給取をして母を助けて居る。二番目は繪の方の天才、先生から帝展への出品を慫慂されるほどになつて居る。三番目が男の子、小學校からいつでも一番、今は中學の三年である。その次が女の子で今年女學校へ入學した。かように重き負擔に堪えて女一人の腕でやり切つたばかりでなく、蜂の方の仕事がだんだん順調に伸びていつて、このごろも私に計畫案を示し、かうすれば年收一万圓はたしかだが、どうしたものだらうと云ふ相談であつた。それは相當確實のものであるが、しかし私は今のあなたにそんなにまで金儲けの必要はないからとてお止めした。堂々たる男が生活難などと言つて悲觀して居るものもある世の中に、さりとは實に驚くべき力ではないか。

次に私を驚かしたのは福岡の織田丑尾女史である。女史は故小倉師範學校長織田數馬氏の未亡人である。女史の話も全く駒井姉と同じ樣な境遇の人である。御主人に死別して、同じく四人の子供を抱へたのである。女史はその四人の子供を敎育すべく按摩になる。たゞその心事を偲ぶだけでも私には泣かずには居られない。織田の家內だ、可愛想だ、賴んでやれと御情で賴んで貰へば結局夫を恥かしめることになる。そこで同じもみ賃なら、あの按摩ほど上手な按摩はないと言はれる程の名人にならねばならぬと奮起して、いよ〳〵その道の研究をすゝめ、從來の按摩とは全くやり方を異にした一つの新らしいあんま法を案出されたのであつた。その方法で揉むと、もむ人は非常にらくであり、もんでもらふ人も又非常に氣持がよいので、あちらこちらの家庭から是非にと聘せられるばかりでなく、女學校などでは生徒にそのあんま法を敎へたいと云ふので、今や女史は方々から引つぱり凧である。

尙女史は、朝から晩まで立ち働く自分の體の勞をいやす爲めに自己按摩を案出した。誰にでも出來る家庭健康法だから、之亦大いに廣まつて居る。私の學友の一人は、その家庭健康法によつて、今迄弱かつた體がすつかり達者になつたと言つて、切りとその家庭健康法を推

賞して居るほどである。

かくして二人の娘さんは、何れも女學校を卒業し、御長男は帝大の一年生、御次男は中學の五年に在學中である。

更に又私をして、心からなる敬服を禁ずること能はざらしめた一女性は、神戸葺合町字中尾、衛生病院々長野間菊子女史であつた。女史は十七年間中風で全く寝た切り、足も手も絶對に自由のきかず、口一とつきけぬ夫に奉仕したばかりでなく、七人の子供を立派に教育し今や衛生病院と云ふ神戸第一流の大病院の本院と分院、更に夏は輕井澤に出張するなど、驚くべき大經營を一女性の身で平然としてやつてのけて居る。この衛生病院に入院したことが縁となつて、信者になつた人は、今迄男女何百人と云ふを知らないほどである。

衛生病院は、全く他の病院とその趣きを異にして、物理療法、食餌療法、豫防療法に女史獨特の技術と確信を持ち、他の病院で全く見捨てられた樣の病人をも、殆ど不思議によくしてゐる。年も幾つかきいたこともないが、子供さんから推算して、どうしても女史は五十歳

以上でなくてはならぬ。しかもその精神の若々しさ、その元氣快活な事つたらありはしない。まだ何處まで伸びるかわからないほどの精力を示して居る。

以上は、最近、私が知つた人についての話であるが、これ以外にも、かう云つた例はまだいくらもあるであらう。

人間と云ふものは、恰も北氷洋を悠々と流れて居る氷山見たいなものだ。氷山が人目に見えて居る分量はといふと、全體の十分の一だけであつて、あとの十分の九は水の中にかくれてゐる。丁度人間もそれに似て更に甚だしきものがある。多くの人が他の人を見て「あれはあれだけの人間だ」と評價するのを見るに、その人が現に今日までに表はした力だけについて言ふのであつて、彼はそれ以外に、まだどれだけの潜勢力を持つて居るかわからない。さればこそ、機會を供し、動機を與へさへすれば表はれる。が夫は始めから潜勢力として持つて居るからであつて、ないものゝ出てくる筈はない。人間を絶對境に突き落すと、絶對智が生じ、絶對力が働き出すのである。

けれども以上三人の例は、いづれも偶發的に、外から與へられた逆境の刺戟によつて奮ひ

起つたのである。だから我々には、いつその機會が與へられるか、それとも與へられぬかわからない。そう云ふ偶發的な出來事の自然に起り來るを待つてゐる譯には行かぬ。こゝに於てか自發的に、人爲的に此の潛勢力を引つぱり出す方法の案出が大切である。

曾てアメリカに、スマイルスと云ふ人があつた。此の人はその著書及び講演に於て、多くの人を奮ひ立たせたといふので有名であるが、今やそのスマイルスとまけずに多くの人を奮ひ起たせる第二のスマイルスが出て來た。それはマーデン博士である。

マーデン博士の著書の中、最も代表的のものは How to get what you want と云ふ本であるが、その中に此事に關して極めて興味ある一つの比喩が語られて居る。

兒獅子がある日、母獅子の眠つて居る間に巣を出て森の中で遊び戯れてゐた。種々變つたものが氣を引くので、兒獅子は一寸探險をしてみやうといふ心に成り、自分の家からはなれた大世界は如何樣なものか、其れが見たいと思ふて出かけて行つた。其の中兒獅子は、獨り遠くにさまよつて、遂に歸路を見失ひ、とうとう迷兒になつてしまつた。兒獅子は驚いて氣

も狂はしく、八方に走り廻り、悲鳴を擧げて母を呼び求めたが、母の答へはなかつた。つかれはてゝせんすべもなくなつた時に、恰も好し、此頃兒を失つた羊が之に出會した。羊は憫れな啼聲を聞き付けると此の兒獅子の近くに來て、やさしく世話した上、遂に養子としてそれを己が棲家に引き取つたのである。

羊は此迷兒を愛して育てたが、其内に其れが羊よりも大きくなり、時には何だか薄氣味惡く見ゆる樣になつて來た。其の眼の底には羊の了解の可能ぬ、不思議な光を見る事も度々であつた。

しかし、當分の間は、養母養子共に幸福な月日を送つて居たが、或る日、向ふ山の彼方に空を壓して、大きな一頭の獅子が勇姿をあらはした。獅子はふさ〳〵として立髪を振つて、谿間にこだまして鳴り響く樣な吼聲を發した。すると母の羊は恐れて立ちすくんで了つたのである。併し此の不思議の音響が兒獅子の耳に達した時に、兒獅子は魔に打たれた樣になり是迄嘗て覺えなかつた感じがして、全身がわな〳〵と殆ど震へ上る樣な氣がした。その獅子の吼聲は、兒獅子の心の底の琴線に觸れ、是迄に無き新らしき慾望とも云ふべき、不思議な

活力の自覺が發生したのである。

新生の力は、兒獅子の心を動かした。是に於てか兒獅子は自ら何をするのかも考へずに、殆んど自然的に獅子の吼に應じて吼り返した。そのうち、自己の内に勃然として起つて來た新らしい力に、自ら恐愕の念に充ちて慄へながらも、一旦醒めたこの動物は、つゐに情深き眼で母羊を見やり乍ら、向ふの山の獅子の方に飛び去つて了つたのであつた。

迷兒の獅子は自己を發見したのだ。此時迄兒獅子は小羊の様に、無心に母羊の傍に遊びくるつて居た。そして仲間のものが爲し能はぬ様な事が可能るとか、普通の羊に比して格別大なる力を持つて居やうとかいふ事は、夢にも想像しなかつたのである。まして山中の百獸を威服し能ふ様な力があらうなどゝは想像もしなかつた。彼の考へは、只單純な羊の考へで、犬が見へたらば逃げ、狼の吼ゆるのを聞いては戰慄するものとしか思つてゐなかつた。然るに今は、是等の犬や狼が、己を見て、直に逃げ隱れるに至つたのを見て、自ら驚いてゐるのである。

兒獅子が、自ら、我は羊なりと思ふて居た時には、羊の如く臆病にして因循であつた。隨つて、羊丈けの力と勇氣しか持たず、到底獅子としての力を出し能はなかつたのである。他から注意するものがあつても、中々獅子の力など出せるものか、僕は普通の羊である。普通の羊と異るところは無い。他の羊の爲し能はぬものは、僕にも到底できぬのだと云ふに止まつた。然るに今や、獅子と云ふ自覺が出來てみると、此の兒獅子は玆に心機一轉して、新らしき動物となり、山中に於ても彪と虎の外には競爭のしてもない森の王となつたのだ。自覺は確に彼の力を二倍、三倍、或は幾層倍にした。此力は、彼が獅子の吼咆を聞く前の瞬間まで、彼には全然なかつたものである。

兒獅子の自覺を喚起した向ふ山の獅子の咆吼が無かつたならば、兒獅子は永久に羊の生涯を續け、遂に自己の内に潛在した獅子性を知らずに濟ました事であらう。さればとて、獅子の咆吼は、彼の力に一物を加へた譯でもなく、單に内にあつたものを喚起し、已に持つて居たものを喚起したのみであるが、已に斯る大發見ができた後の兒獅子は、最早や羊の生活に滿足し得られなかつた。

獅子の生涯、獅子の自由、獅子の力、及び山野は既に彼のものであつたのである。

之と同じく、我々人間にも各個人の内に眠れる獅子の性格はある。たゞ問題は、如何にして之を喚起すべきか。何事が私共を目醒し、私共の心の奥底を搖り動かし、我等の内に潜在して眠つて居る偉大なる力を引き起すかの點である。だから私共は、私共を心のドン底から奮ひ動かしてくれる様な、大雄辯、大藝術、大精神、大人格に觸れる機會をつとめて捕へることが大切な心掛けである。

私の學友松居法學士は、東西古今の偉人を選び出し「其の幼年時代」はどんな風であつたかと云ふことを研究して居るが、その結果によると、すべての偉人が、殆んど例外なしに、十三四才の頃、何物かに觸れて、非常に強い感激を受け、そこに人生のスタートを切つて居ると云ふことであつた。

今日迄、私に、強い感激を與へたものは割合に藝術家に多かつた。勿論私は、非常に忙がしい生活を送つてゐるので、世にありふれた程度の藝術まで、一々鑑賞して居る時間の餘裕

はないが、大家といふ大家のものだけは、出來るだけ、見たり聞いたりすることにつとめて居る。

私は一時は相撲を見ることが非常にすきであつた。横綱と横綱とが、土俵の上に出て四股(股)を踏んで鹽まき、塵切りよろしくあつて、今將に相手に向つて突きかゝらんとする時の光景の如き、私には何物にもまさる藝術であつた。見る見る私までが、その相撲の中に引きこまれて、力士と一緒に力を入れて居るのである、そこに私は、何とも言へぬ痛快の氣分を味つたのである。

又私は、曾てエルマンのヴイオリンをきいたことがある。樂器は人間の聲に近いものほど進んだものであるが、バイオリンは人間の聲に一番近い。だからバイオリンが一番進んだ音樂だと言ふやうのことも音樂通の友人からきかされて居たが、長い間バイオリンの本當の妙味はわからなかつた。けれども一度此エルマンのバイオリンをきくに及んで、私はすつかり醉はされてしまつたのである。私はその時、バイオリンが鳴つて居るのか、エルマンが唄つてゐるのか、どうしてもきゝ分ることが出來なかつた。それほどエルマンのバイオリンは

人間の聲に近いものであつたのである。

エルマンの場合に於ては、バイオリンとエルマンとは、二つのものではなくて、全く兩者が一つになつてしまつて居る。その後エルマンのレコードをきいても、その時の光景がいつもまざ〳〵と頭に浮んでくる。それまで一向わからなかつた西洋音樂が、かくて少しわかりかけて來たような氣さへもする。

又、曾て私は、鳥人スミスの飛行ぶりを見たことがあつた。その頃はまだ、日本の飛行界は至つて幼稚なもので、飛行機と言へば必ず墜落するものゝ如く思はれた時代であつた。その日スミスの飛行ぶりを見んとして集まるもの、何萬、或は何十萬であつたか知れない。何といふ人を引きつける大きな力であらう。私は、たゞそれだけで、もう感激の涙を禁ずることが出來なかつた。

やがて時が來て、彼はいよ〳〵爆音勇ましく天空の人となつた。上は皇族方の御眼より、下は乞食立ん坊の目に至るまで、等しく共に彼に向つて仰ぐ。彼が横轉、逆轉、木の葉返し等の妙技を演ずる時、觀て居るものゝすべては、たゞもう冷々して其膽をつぶさんばかりであつた。彼の妙技が終つた時、あちらでもこちらでも、太いため息をついて居るのを見た。すべての見物人は、彼が妙技を演ずる間、息をもつかず、彼につりこまれて居たのである。それは何といふ大きな力であらうか。

かく、私共の心は、大雄辯、大藝術、大精神、大人格、つまり人間の本氣に觸れる時に、自づと感激を催ふしてくるのである。自づと大いなる生命の力に打たれ、その前にひれ伏すのである。（大正十五年十一月）

第二篇

（片々集）

他に對する二つの道

我等は、人に對する道と、人の仕向けに應ずる道とを、別々に考へる必要がある。

我等は人に對しては、どこまでも親切であり、何處までも謙讓でなくてはならぬ。よし人が、自分の好意を無にし、恩を仇で返すやうなことがあつても、我等は之を惡んだり憤つてはならない。我が愛の貧しさを覺りて、尙ほ愛の道を勵むべきである。

けれども人の仕向けに應ずる時の覺悟は、これとは全く別である。それは人に、かうして貰はう、あゝして貰はうといふ期待をもつてはならぬ。期待をもつが故に失望の谷底に陷るのだ。

靈性

我等の衷には靈性があり、何人も之ある事を自覺せねばならぬ。之を自覺し、之の靈性を發揮することによつて、我等は身を救ひ、家を救ひ、國をも救ふことが出來る。

お太鼓もち

たゞ單に、他の一顰一笑に氣を使ひ、その鼻息を覗つて、うまく調子を合せるだけの分ならば、お太鼓持ちでもよく成し能ふ。

つとめて他の痛い處へ觸れないやうにし、他と調子を合せつゝも、而も他を神にまで導いて行く。之は信仰あるものにして、始めてよくする事が出來るのである。

生活體の統一原理

我々の家は、たゞバラ〳〵の、雜然たる考へを持てる者の集團ではなくして、そこに組織あり、綜合のある、統一生活體でありたい。統一生活體たらしむるためには、そこに組織、綜合、統一の原理がなくてはならぬ。古は夫唱婦從を以て統一原理として來たが、此の原理は、人格觀念の高調せらるゝ今日では、最早通用しない原理である。

夫が自分を一家の中心として、何でもかんでも妻を從はせることによつて、統一生活體を造らんとする事が、夫の我儘である如く、妻が又かく希望する事も、同じく妻の我儘である。

子供中心主義、年長中心主義、それは皆よくない。

すべての人を超越し、而もすべてのよき心を內面的に統一する事の出來るものは、神の外にはあり得ない。神中心、然り我等はたゞ神を中心とする事によつてのみ、我等の家に完全なる統一生活體を造り上げることが出來るのである。

他人の事がよく眼につく時

人間が利己的である時に、著るしく他の忘恩的態度がよく目につく。他の忘恩的態度が著るしく目につく時に、我等は大いに自分自身に就て省みる所がなくてはならぬ。

命令せぬ導き

子供に對して、外からかうしなさい、あゝしなさいと迫るよりも、よく氣をつけて見て居ると、子供に自らよき心の發動して來る時がある。

「やあ偉い、實にお立派だ！」

その機を逸せず、直ちに之に聲援し、之を助長してやる事が最も賢い導き方である。

精神的二重生活

二重生活の不經濟は、人皆之に氣がついて來た。洋服を着たり和服を着たり、靴をはいたり下駄を穿いたり、飯を食つたりパンを食つたり、日常萬事に兩方の設備、仕度、附屬品を整へるといふ事は、無論不經濟な事である。けれどもそれ等は、まだ多く言うに足らない不經濟だ。その程度の不經濟なら、まだ忍んで忍べぬことはない。

だがそれよりも、モット〳〵問題にしたいのは、精神的二重生活である。人には誰れでも立派な人間になりたいと云ふ意志がある。蓋し之が人間の最高意志であらう。しかし、我等の心の裏には、兎もすればこの最高意志を裏切る弱い卑劣な心がある。之が原因となつて、所謂精神的二重生活なる現象が表はれてくる。

精神的二重生活より大なる生命の浪費はない。

一歩を讓る心

人と人との衝突の起る有様を見るに、お互が自己を僅に相手方よりも有利の地位に進めようとする所から起つて來るのである。それ故、何れかの一方が、之と反對に、自己を僅に相手方より不利の地位に立ち退けやうとすれば、そこに自らゆとりが出來て、決して衝突を招くおそれがない。

何時でもすこゝ廻つて、相手方より僅に自己を有利の地位に押し進めてみた處で、一生涯に、どれだけの利益をするものであらうか。

何時でも溫和しく出て、相手方より僅に自己を不利の地位に立ち退けやうとした處で、一生涯に、どれだけの損がありませうぞ。

生涯道を讓るとも、以て十里を失はず
生涯畔を讓るとも、以て一反を失はず

一生涯かゝつて僅に一反歩足らずの田畑を益するがために、我れと我が品性を傷け損ね、我れと我が心を苦しめ惱ます分量の、いかに大なるかを思へば、我等は、常に、一歩を讓つて、我が品性を守り、我が心を怡ばす態度に出づべきである。

愛の實例

愛とは何か、理屈を言へば際限もなくむづかしいものになる。むしろ自然に發動して來る愛情をしつかりと見つめるに如くはない。それが一番たやすい愛の諒解方法である。

我が子が病む、看て居る親の心には、病む子に勝る苦しみがある。代ることが出來るものならば、いま、すぐにでも代つてやりたい。どんなことをしても、我が子の病氣をよくしてやりたい。此の親心、これが卽ち愛の實物である。

衝突闘爭なき目標

各人が、高き地位、豐なる富と云ふが如き、有限性のものを最高目標として追求すれば、窮極する處、衝突となり、闘爭となることは知れ切つたことである。

神の完きが如く、我も亦完からんとする目標だけは、萬人等しく之を望んでも、決して衝突闘爭を來す忍れはない。

懺悔

何のかのと、しかつめらしく理屈は言つたが、自分も畢竟するに責任を他に轉嫁して「先づそつちからいゝ人になれ、そうしたら、おれもいゝ人になつてやる」と云ふ世間なみの男に過ぎなかつた。それだから、先方が今日迄、いゝ人にならうと思つても、どうしてもいゝ人になれなかつたのだ。

此の世の中で、何が辛いと云つて、いゝ人になりたいと思つて、いゝ人になり得ないほどの辛さがあらうか。

思へば自分は、本當に罪の深い男であつた。今日こそ、自分は、自分の今日までの態度の誤りをはつきりと知ることが出來た。

心の底から悔ひ改める。人よ、ゆるしてくれ！

かくして自分の心が、一だけ改まつた時、先方の心は二も三も改まつて居る。人は、體驗を經て、いよ〳〵今日迄の自分の心得違ひであつたことに氣がつく。

生命の浪費

信仰とは生命を握ることである。信仰にはいつて、はじめて本當の人間生活がはじまるの

である。

罪悪とは、信仰から離るゝ一切云爲行動の謂である。罪を犯すことは人間生命の浪費だ。

先手と後手の動き

聖人は未だ亂せざるに治む。故に亂なし。良醫は未だ病せざるに治す、故に病なし。

豫防の一は治療の十に勝る。何事でもさうだ。能率增進の秘決は、すべてのこと、先手を打ち、後手にならないように心掛くることである。

神を見出す迄

ある人が、一夜、極めて眞面目に、神を知りたい、神を信じたい、どうしたら神を知り神を信ずることが出來ますかと訴へて來た。

私は、折柄、內村鑑三先生の「所感十年」に讀みふけつて居たが、先生の神を識るの途は、次のやうに示されてあつた。

「神を識らんと欲せば新に其存在の證據を求むるを要せず、神を識らんと欲せば行を改め

よ。義のために勇なれ、慾を減ぜよ、心を淸くせよ、殊に自己の眞價を認めて謙遜なれ、然らば神は事實となりて、吾人の心に現はれ、吾人は其存在の證明を求むるをやめて、吾人の身を以て彼を世に示さんと欲するに至らん。神は道德的に之を發見するを得べく、智慧的に之を看出す能はず」

さらに、神の有無に就ては、次の如く敎へられてあつた。

「或る人は神ありと云ひ、亦、或る人は神無しと云ふ。而して有りと云ふ證據なしとすれば、無しと云ふ證據も亦あるなし、余輩は有りと信じて行ふなり。而して行ふて有りと云ふ實證を得るなり。神の存在は科學的に之を言へば假說の一なるに相違なし。然れども最も多くの蓋然性を有する假說にして、亦最も多くの事實を證明するに足る假說なり」

私は、はじめ之を讀み聞かせ、更に布衍したが、幸ひにも、內村先生のお說は、その人の心に働きかけた。その人はその晩から、熱心に聖書をよみ出した。これによつて彼が若し救はるゝならば、一人成佛して九族天に生ず。彼の一門が皆救はるゝのである。私は、今、あけてもくれても彼の爲めに祈つて居る。

一人の魂が救はれる。世にこんな祝福すべきことがあらうか。

日々是好日

いくら立派な家屋を作つても、その中に住む夫婦、親子、兄弟の關係が圓滿でないならば、それらの人々の心には少しも幸福はあり得ない。

食前方丈、いくら山海の珍味をならべても、心に不滿があり、不平があり、にくしみがある時、なんでそれがうまからう筈がない。互に睨みあつて、御馳走を食ふよりも、みんなが仲よくニコ〳〵しながら粗食を食ふ方が、どれだけうれしいかわからない。

春に百花あり、秋に月あり、若し心にわだかまりさへないならば、春夏秋冬、悉く人間の好時節である。

東京府下三河島に、俗稱干軒長屋といふ貧民窟がある。そこにゐる鈴木益平氏夫妻は、燃えるやうな信仰を以て貧民の友となり、賴まるれば洗濯からボロの繕ひまでもしてやる。三日に一日は食ふものもない日があつても、夫婦は喜んで神に仕へてゐるといふ。何といふ尊い生活であらう。

育ち伸ぶ

一日として、一瞬間として、何にも爲すべきことのないといふようの時はない。爲すべきことのある限り、我等は育つとき、伸びるときを持つ。

惡魔

惡魔は常に我等の身邊にあつて、苟くも我等の心に隙間があれば、內より、又外より、乘ぜんと待ち構へて居る。

我等が此惡魔に機を得させぬが爲には、常にしつかりと神と結びついてゐることが大切だ。

光る言葉

多くの人の言葉や文章に接した時、それがよく出來て居れば居るだけ、うまく言ひまわしたものだナ、たくみにかき表はしたものだナと云ふ感じがする。

けれども我等が、聖書を讀む時、うまく言ひまわしてあるとか、たくみに書き表はされて

あるとか云ふ感じはなく、それらの人の内なる精神が、當然とるべき形をとつたものとしか思へないように書かれてある。

罪

罪と知つたら直に悔ひ改めなければならない。過ちは君子にもある。

過ちのないのが貴いのではなく、誤つては改むるその勇氣を貴しとする。

罪を犯して罪を悔ゆる。惡中、既に善の胚種のあることを知る。

力量

同じ火災に遭つても、非常な力量を發揮する人と腰をぬかす人とがある。

同じ境遇の刺戟も、それによつて、自らを鍛練して行く人と、自暴自棄、自ら破滅の淵に驅け込む人とがある。

精神に緊張味が薄くなつて來ると、時間・精力・全我、一切が不經濟となる。精神に緊張味が增して行けば、時間・精力・全我、一切が經濟的になつてくる。

自分の一言一句

自分の一言一句をして、悉く確信に根ざしたものにあらしめたいと切望する。叫ばざらんと欲するも叫ばずには居られぬと云ふ、衷心生命の要求に基いたものであらしめたいと切望する。

鬪爭の姿

今日の社會の有樣を見ると、人と人とは互に我が儘の出し合ひをして居る。その結果、他を傷つけたり、傷つけられたり、悶え苦しみ、怒り恨み合つて居る。どちらが間違つてゐるのでもなく、等しく共に間違つて居るのである。

この時、どちらかの一方が、自分の間違つてゐることに氣がつけば、問題はそこから解決するのであるが、自分の顏が自分で見えない如く、自分の間違ひは自分には解らない。そこでたゞ相手をのみ惡いと見るから相手は猶いきり立つ。かくて双方がいきり立つのだから何處迄も惡化する。惡化して停止する處を知らない。

それを眞によく人生を達觀した人、解脫した人の眼から眺めると、いかにも淺間しくてたまらない。不憫でたまらない。可哀想でたまらない。

こゝに於てか、衆生無邊誓願度、煩惱無盡誓願斷といふ佛の念願が生れて來るのである。

尊敬

夫を尊敬することの出來る妻は幸福である。妻を尊敬することの出來る夫は幸福である。

一體尊敬は人々を幸福にする。然るに多くの人々は、何ゆゑに互に尊敬し合つて、この幸福をかち得ないのであらう。それは尊敬が、相手方に尊敬するだけの値打があつて始めて起るものだからである。

何處から見ても、尊敬に値しない者は、如何に尊敬しなければならぬと思つても、尊敬の出來るものでない。

世間には、よく相手が自分を尊敬しないと云つて怒る人があるけれども、それは全く無理な注文である。尊敬しやうとする心は、強いられれば強いらるゝほど、尙更引ッ込んでしまふものなのである。だから人は、他に尊敬を强要するよりも、他の尊敬に値すべき自らの人

格を作り上げることに心掛けねばならぬ。

金持下乘

金錢は何處へもの通行券である。然し、たゞ一ヶ所丈け通用せぬ所がある。それは至聖所にまで立ち到ることは許されて居ない。

例へば、伊勢參宮に於て、始めの程は汽車に汽船に俥に自動車に、あらゆる交通機關がある。然しかくて奥へ奥へと進んでゆくと「皇族下乘」と云つて、皇族ですら御車を捨てさせなければならない所がある。

我等が人の心の至聖所に向ふ時も、之と同じである。金錢の力を以て、かなりの所までは漕ぎつけ得ても、尙遂には「金持下乘」といふ所があるものである。而して此の金持下乘から先きこそは、唯々人格の人のみの天地である。併も人生の勝負は、この金持下乘の天地へ幾歩踏み入れ得たかにより定まるものである。

公憤と私憤

平常、國家のことを念として居る人にして、始めてよく國家の爲めに憤りを發する事が出來るのである。

平常、國家の事を念としてゐないで、たとへ國家の爲め憤りを發するような口吻をもらしても、それは嘘だ。

私憤を洩すは易く、公憤を發するは難い。

眞の建設はそこから

人は、自分の生活態度が間違つてゐたことに氣がついても、容易に之を改めることが出來ない。そして多くは、心ならずも、その間違つた生活態度を何處までも引きずつて行くのであるが、世に之ほど馬鹿げたことはない。

いくら渡りかけた橋であつても、間違つてゐる道と氣がついたら、引つ返して出直すより外に仕方がない。たとへその爲めに、無一文になつたとするも、間違つてゐる生活態度はさらりと振り捨てゝ新らしい生活に入るべきである。

眞の建設は、そこから始まる。

「立ちて歩め」の一語

人が人になるのに最も大事なものはその人の獨立心である。その人を助けるといふことはその人の獨立心をつよめることでなくてはならぬ。その人の獨立心を弱め、その人に依賴心を起させるような助け方は、助けたのではなくして、却てその人を害つたのだ。

ペテロが、美しの門より、エルサレムの宮殿に入らんとする時、そこにゐた一人の人が、泣くが如く、訴ふるが如く彼に施濟を求めた。

彼はその人に眼をとめて「我を見よ」と云つた。その人は何かもらへるだらうと思つて彼を見ると、彼はその人に「金錢は我になし、されど我に有るものを爾に與ふ。ナザレのイエス・キリストの名によりてすゝむ。起ちて歩め！」と言つた。

その人はたちどころに強くなつて躍り立ち、且つ歩み、且つおどり、神を讃美しつゝ彼と共に宮に入つた。

「我を見よ」の一語である。お前とおれと何處が違つてゐる、たゞ人生の考へ方が違つてるばかりだ。おれが生きてゆける世の中にお前の生きてゆけぬことがあるものか、「立ちて歩

め」だ。獨立して生きて見ろ、人の助けなど求めて生きるよりなんぼ氣持がいゝか分らぬといふのである。おゝ何と云ふ尊い教へであらう。これが本當の人の助け方だ。金さへあつたら人が助けられると思つたら間違ひだ。

世に人を助けるほどむづかしいことはない。

神が吾人を援くる如くに人を助けるのが本當の助け方であるならば、信仰のない人には本當に人を助けることは不可能だ。

頽廢氣分の害毒

常に體は疲れて居るやうで、更に活氣がなく、いつも寢たりぬようで、そのくせ寢ても一向に熟睡が出來ぬ。心に何らの張りもなければ希望もない。之を頽廢氣分と云ふ。

身心を害ふこと、此の頽廢氣分より甚だしきものはない。此の頽廢氣分から免れるが爲めには、須らく自己の身邊一切の問題を整理して、これぞと思ふ一事に向つて自己の全肉全靈を打ちこみ、造次にも顚沛にも心をその一事から放たず、寢ても醒めてもその一事を思ひつめ、遂にはその一事になり切つて生きることだ。

子の態度、親の態度

殆どすべての家庭は、何等かの問題で苦しんで居る。日本の家庭は、あまりに問題が多すぎる。さうしてその原因は、日本の家族制度が獨立心の養成に不適當で、依賴心を助長するように出來て居るからだ。

子が親の恩を深く感謝し、報本反始の誠を致す。之は人の禽獸に異る所以の大精神の發露であつて、古今に通じ、東西に亘りて誤らず悖らざる大道である。

けれども親が子供を一人前に育てあげた養育の勞苦を恩に賣つて、その代償として自己の晩年の生活の保障を得んとするが如き精神態度は、むしろ人類の恥辱でなければならない。

ひとり人間ばりではない。すべての動物が自己の生み落とした子らを獨立して生活することが出來る處までは養育して居る。

子が親に依賴することの不可なるは猶親の子に依賴することの不可なるが如しだ。

そこで私の提案はかうである。

子らが滿二十歳、所謂成年期に達する迄の面倒を見てやるのは、親の當然の義務と見るべきである。子らにして成年期に達したならば、親は大膽に之を突き離して獨立させるがよい。さうするには親たるものは子が成年期に達する迄には獨立して生活し得るまでに育てあげる必要がある。子等にして既に獨立して生きて行ける處までいつたら、親は遲滯なくその子の獨立を宣告すべし。それには古の元服制に倣つて一定の儀式を行ひ、家の內外に對してそれを明かにする方法をとつたがよいと思ふ。

獨立した男女は他に出て働くを原則とする。双方合議の上なら家にあつて父兄の仕事は手傳ふことも出來る。但しその場合には子らは契約に基く勞銀を請求することが出來ると同時に契約に基く生活費を拂ひこむものとする。

學業の成績よくて、上の學校に進めるものは父兄と相談の上學資を貸してもらつて學校生活をつゞけ、成業の曉に之を返濟する方法をとることも差支へないことである。

その代り親は決して子らに向つて孝養を强いてはならぬ。子らが自發的に親に向つて酬いんとする貴い精神が、少しでも傷つけられてはならぬ。

夫婦兄弟の間にありて、自發的に、他に奉仕し、又感謝して他の奉仕を受くるは美しいことであるが、始めからそれを期待することは醜いことである。注意せねばならぬ。

風袋ぐるみの人間評價を嗤ふ

世人の多くは誇るべきものと恥づべきものとをとり違へて居る。自己の生活全部が自己の力によつて支へられて居るほど大なる誇はない。自己の生活を自己の力を以て支へることが出來ず、父祖乃至他人のおかげで支へてゐることほど恥づべきことはない。それが華美の生活であればあるほど一層恥づべきことだ。

然るに世間では、どつちかと言へば、自己の生活を自己の力によりて支へて居る人が賤しまれ、自己の生活を自己で支へることが出來ず、父祖乃至他人の力で支へて居る人が、何か特別上等の部類に屬するもの〻如く考へられて居る。あらゆる不合理の世相の中で、これほどの不合理はない。

何家の御令息、何家の御令嬢、乃至誰の奥さん、誰の兄弟であると云ふが如き存在は、所謂風袋ぐるみの評價であつて、正味の評價ではない。人間の價値は、一切の風袋をとり去つ

た裸體正味で決せられねばならぬ。

その裸體で立派に自己の生活を支へ、餘力を以て、進んで人の爲め、社會の爲につくせる人が本當の立派な人間だ。

既に一定の年齢に達したる男女にして、尙ほ且つ自己の生活を支へることが出來ず、僅かに父兄其他の恩惠によつて生活するが如きは、最も腑甲斐のない生活態度だ。

最愛の我子らをして、今後の社會に處してまごつかせないやうにする爲めには、人の子の親たるものは、その貧富にかゝはらず、先づ我子らをして、その裸體的力量を以て自己の生活を支へることの出來るよう育てあげることに努力すべきである。

我は審判かじ

「審判くなかれ、審判かれざらんが爲なり」

私は、一切審判ことをしない積りだ。

誰がよくて、誰がわるいのではない。

人間は誰たつて皆不出來なのだ。

獲んとするものは之を得ず

「我等之によりて愛といふことを知りたり」

愛とは己を犧牲にして、人の爲につくすことだ。

人のことはおいて、先づ自分自身について考へて見やう。

一體自分には、どれだけの愛があるか。

先方が自分に對して、惡意をいだくのはむしろあたり前だ。自分も先方に對して惡意をいだいてゐるのだもの。

先方が自分に對して、一向感謝してくれない。それを不服に思ふ前に、先づ自分が先方に對して、其れによく心から、どれだけの愛をそゝぎ得たかを考へて見よ。

なる程、形の上ではいろ〳〵のことをしたであらうが、心から喜んでしたのでなくては愛とは言へない。

愛は必ず酬ゐられる。

よし又酬ゐられないとしても、愛すること、そのものゝうちに、充分の幸福があるのだ。

愛すること、それ自らのうちに充分の幸福を感ずることが出來る人は、決して、他の感謝などを問題にしないであらう。

他の感謝を問題にしない所に、我等は、始めて他からの感謝を受け得る資格を見る。獲んと欲するものは之を失ひ、捨てんとするものは之を得る。皮肉と言へば皮肉であり、意地わると言へば意地わるだ。が、夫が人生の姿である。夫が人間なのである。

自他の力を腐らすものは

不平不滿ほど、自他の力を腐らすものはない。一體、不平、不滿は何處から起るか。

他に對する期待の裏切られた處から來るのである。

じてみると、我等が、不平不滿の不愉快から救はれんが爲には、他に對する期待を一切捨てることが必要だ。

——（自大正十三年至昭和二年）——

第三篇

一　人間生活雜考

すべて人には生きんとする强い慾求がある。生きるためには食わねばならぬが、其の食ひ方に三通りある。即ちもらつて食ふか、盗んで食ふか、働いて食ふかである。中には「私は買つて食ひます」といふ人があるが然らば其の買ふ金をどうしてとりますか、問題はそこである。矢つ張り前の三つの方法の中のどれかによらねば金がとれない。結局すると此の三通りしか、吾々の食ふ方法はないといふことが分るのである。

さて此の三通りのうちで、どれが一番正しいかと云へば、勿論、働いて食ふことであると誰しも答へる。けれども、それなら道徳問題は別にして、どれが一番割がいゝかと訊ねるとそれはもらつて食ふことだらう。盗めば罪人になり、働くのは骨が折れるが、もらふのは罪人にもならないし、身體に骨も折れない。たゞ人から意氣地なしだと思はれるのはすこし恥かしいが、それさへ忍べばこんな樂なことはないと大概の人が思ふ。けれども事實は果して

さうであらうか。

昔支那に衞といふ國があつた。其の國にビシカといふ素敵な美人がゐて、國王の寵愛を一身に集めた。

一日ビシカは王とただ二人、美しく手入れされて居る宮裏の庭に出て逍遙し、みづ〳〵しく熟してゐる果物園に來た。そして如何にも美味しさうに熟してゐる一つを取つてたべて見たところが、何とも云へぬ甘さなので「陛下、如何で御座います、これを召し上つて御覽遊ばせ、何とも云へぬ結構な味で御座います」と自分が食ひかけた果物を王に出すと、王は之を手に取つて一口食つて見た。ところが果して美味いので、ビシカの手を執り「汝何ぞ我を愛するの切なるや、其の口を忘る」と喜んだ。

かくてビシカの寵愛は益々深かつたが、段々年を重ねるにつれ、ビシカの花の顏にも小波の皺がよせ、容色が次第に衰へて來たので、王の寵愛はいつしか他の年若い侍女にと移り、つひにはビシカを顧みないやうになつた許りでなく「彼は嘗て朕に食ひかけの果物をくれた無精者である。早く宮廷から追ひ拂へ」と云つた。綸言は汗の如く、遺にむかし君寵を一身

に集めたビシカも、遂に宮廷を追ひ出されてしまつたのである。人の心と秋の空といふが實に頼みがたきは人の心である。

これは他によつて生活するもの丶常に經驗する悲哀である。親の遺產などをもらつて何不自由なく生活して居るものが、一朝大災害に見舞はれて、一切の物質を失ふた時は、樹から落ちた猿のやうな慘めなものとなる實例は多い。貰つて食ふのを氣樂と見るのは、それは表面の肉體的安逸を見たもので、一歩其內心を窺ふ時は、絕え間なき不安の連鎖であることが分る。

それならば盜んで食ふのはどうかと考へて見るのに、他人が汗水流して貯めた財物を、こつそり盜んで食ふのであるから、これは一番よいやうであるが、段々調べて見ると、これも甚だ割の惡いものである。我國の强盜窃盜が一ケ年に盜みとつた總價格を、彼等が强窃盜をして働いた延日數で割つて見ると、平均一日が五十錢以下になるといふことである。

良心の苛責を受け、社會の人を憚つて、世間の人達が氣持がよい夢路を辿つてゐる夜の目

も寢ずに働いて、それで五十錢にならぬとは、何といふ慘じめな貧弱な收入であらうか。

斯く考へて見る時、道德的に批判することは暫らく別問題としても、もらつて食ふのも、盜んで食ふのも、あまり割のいゝ食ひ方ではない。矢張り第三の方法である働いて食ふといふことが、一番割の良ひ食ひ方であることが分る。

昔から、長者三代なしと云ひ、賣家と唐樣で書く三代目といふ。金持の家は、長く續かぬものが多いといふのである。

私は曾て試みに、明治天皇の東北御巡幸の跡について調査して見たことであるが、當時は未だ交通の發達しない時代であつたので、隨分多くの日數を要し、其間の御食事御宿泊御休憩などは、特別にしつらへた行在所を除いては、御道筋にあたる民間の門閥家、富豪の家を以て御用をおすませになつたので、此の光榮に浴したものは多數であつた。今それらの家について調べて見ると、約六〇パーセントといふものは、すでに滅びてしまつて居る。御巡幸後僅か五十年たつかたゝぬで此の始末である。今から更に三十年、五十年を經過したら、恐らく滅びるものが、七〇パーセントにも八〇パーセントにもなるであらう、

あなた方の村について、或は郡について調べて見られても、恐らくこれに近い事實を得られることであらうと思ふ。

此の滅び行く家と、榮え行く家とを調べて見ると、直に一家の榮枯盛衰の原理を發見することが出來る。何々家を興した人とか、或は中興の祖と云はれる人を見るに、何れもよく働いた人達である。處がだん〳〵働いた結果、お金が出來てくると、その家に勤勞の精神がゆるんで行く。人の家の滅びるのは、滅びる日に滅びるのではない。よつて來る處、甚だ遠い。勤勞の精神を失ひかけるその日こそ、實に其家の滅び始める日なのである。

世俗に「親が苦勞して、子が樂をして、孫が乞食をする」と言ふ言葉のあるのは、つまり此の眞理を言ひ破つたものである。之に依つて之を見ると、お家の寶は、金銀財寶ではなくして、金銀財寶を產み出す根本、すなはち勤勞の精神でなくてはならぬ。

以上は一身一家の上から見た勤勞の意義であるが、更に勤勞は社會的、國家的、人類的の

意義がある。

吾々は、今日、社會を離れて生存することは一日も出來ない。吾々が生きて行くためには衣食住をはじめ、社會に負ふて居るものが甚だ多い。若しこれ等の生活必需品を社會から仰ぐことが出來なかつたならば、吾々は生存して行くことが出來ぬのである。

而して此の生活必需品は、社會の同胞達が、勤勞によつて作り出した生産品であるから、徒らに其物資を消耗するだけで、社會に何等寄與供給するところがなかつたならば、それは社會の寄生虫である。凡そこれほど社會に迷惑をかけることはない。一夫耕さゞれば天下何處にか飢ゆるものを生じ、一婦織らざれば天下何處にか凍ゆるものを生ず。働いても〳〵猶食ひかねるものがある證據である。生きとし生ける人は必ず勤勞すべし。勤勞を逃避する根性は、社會人として最も惡むべきものである。

一人の人が毎日消費する以上に必ず生産するとしたら、其一日の剩餘は、日を積み年を重ねて行く内に大なる額に達するであらう。反之、一人の人が、毎日自己の生産する價値分量よりも多くのものを消費して行くとなると、其の一日々々の食ひ込みは、歳月を重ねる内に

莫大なものとなるであらう。國民の中に、消費するよりも多くを生産するものが殖へて來てこそ國家は隆盛に趣くが、反之、生産するよりも多くを消費する者が殖えてくるならば、それらの人が殖えるだけ國家は衰頽に傾くの外はない。國民の一人々々の生活態度は、よきもあしきもすべて國家に到達して總勘定が行はれ、その結果がやがて再び國民の頭上に割り戻されて來るのである。これを思へば、よき生活態度は非常なる功德であるが、あしき生活態度は非常なる罪惡である。それ自らが破滅である。

斯くの如く、勤勞の意義をつきとめて行くと、勤勞卽道德といふことになつて來る。勤勞卽道德であるならば、怠惰卽不道德といふことでなければならぬ。働くといふことは、道德を實行することであつて、勞働服を着るといふことは、道德の勇士たるべく武裝をすることである。

我々が働くのは、何も貧乏だから働くのではない。又働かなければ食へぬから働くのでもない。實に働くことそれ自らに喜びがあるから働くのである。そこに人生の意義があるから働くのである。吾々の働く働かぬといふことが、國家、社會、人類の運命に影響するから働

くのである。

かく意識して働く時、働くものは働く誇りを感ぜなければならぬ。又働くものが働く誇りを感ずる時、働かざるものは自づと肩身がせまくなるのである。

國民の勞働感の高低は、其の國家の運命に影響する。支那人は體もよく、如何なる勞働にも堪へる國民であるが、支那人の勞働感は甚だ低級である。彼等が一生懸命で働くのは、勤勞の誇りを感じて働くのではなくして、勤勞がいやだから一日も早く働く境遇からのがれ、働かんでも食へる人になりたくて働くのである。今日の社會經濟の組織によれば、或る程度以上の富を所有すれば、その富からの所得を以てして悠々遊んで食つて居られるのである。

けれどもかくの如く、富の所得によつて衣食し、何等の生産をもせず、たゞ消費一方、而も贅澤な生活をするものは、國家社會から見る時には、むしろない方が望ましき人間である。その環境を害する毒虫である。そこでドイツでは之をレントネルツームと呼び、フランスでは之をランチェーと稱し、イギリスでは之をリージュアー、クラスといふ風に、特別の名稱を附して特に之れを賤しみ且排斥するのである。まことにそれは當然の沙汰である。然るに

文化の低い、人智の未だ發達せざる國に於ては、自ら手を下して何事もせず、たゞ遊んで贅澤の暮しをして居る人を特別上等の人であるかの如く見做して居るのである。

世に何が不合理であるといつて、一生懸命働いてゐる人が世間から蔑視せられ、何にもせずに遊んで贅澤をして居る人が世間から尊敬せられて居るほどの不合理はない。自己の働きによりて自己及一家の生活を支へ、餘力あれば進んで國家社會の爲めに盡す、かくの如き人こそは眞に國家社會の寶であり、人類の恩人であり、文化の創造者である。働かないで遊んで贅澤して居る者達から一切の尊敬と光榮とを奪ひかへせ！　そして之を働くものゝ頭上に持ち來すべきである。社會的にも、政治的にも、はた經濟的にも、働くものゝ位置を更に大いに高むべきである。

但し子供はしかたがない、年よりはしかたがない、病人はしかたがない、白痴瘋癲はしかたがない。それらを除く殘餘の者で、凡そ働くべくして働かざるものは、他の働きつゝある同胞に寄生して、それの所産を奪ひ食ふ吸血鬼だ。人間として、之ほど卑劣な生活態度はない。我等は須らく働いて生きること、即ち勤勞所得に生きるを以て原則とすべきである。

（大正十三年十一月）

二　愛の生活

我等は愛の人の貴い事を知る。我等はどうしたら愛の人になれるか。

氣狂は自分の氣狂である事を自覺しない。それ故に氣狂だ、自分の氣狂たることが自覺出來たら、其の瞬間から氣狂は治るのである。

之と同じく、愛の人になる第一歩は、自分は愛の足りない人間だと云うことを自覺する事である。愛の人になりたい、なりたいと、愛の人たらんことを求むる心の熱がいよ〳〵高まつて來て、發火點にまで達すると、自づとそこに心からなる祈りが生れて來る。

純粹無雜、心からなる正しき祈りは必ず聽かれるものである。

我は今あの人が嫌ひである。けれ共、どうかあの人を愛したいとの一念から、我心が祈りに凝つて居る時には、どうして强いてその人を嫌ひ且つ惡むの心が起り得やうぞ。よし何かのはずみに、そのやうな心が頭を擡げたとしても、念起念滅、それは又祈りによつて直ぐ打ち消されてしまふ。

人を嫌つたり、惡んだりしない樣になつたならば、その人はもう、消極的に愛し得る人になつたのである。

消極的愛でも、愛は愛である。それを今一歩進むれば、積極的愛に入り得る。見よ、心からなる祈りと同時に、我等の愛の生活は始まるのである。かくして人間愛から聖愛へと進んで、遂には神や佛の生活に近づき得るのである。

求めよさらば與へられんである。尙も祈りに祈つて居る時に、愛する心はいや增して惠まれ、愛する機會はいよ〳〵多く與へられる。

さて、一度び、この純眞の愛を以て他を愛してみると、我等の心は、未だ曾て覺えざる大なる喜びの波を感ずる。法喜法悅とは、すなはちそれである。

物の本當の味は、口で仲々說明出來ないものである。從つてその人自身が、實際に、之を味つてみるより外に知るべき術がない。こゝにいふ、法喜法悅の味ひも、その人自身の味得體驗を待つより外に、他からは之を傳へる方法がない。

人間の眞の喜び、眞の幸福は、我等が純眞の愛を以て、他を愛した時にのみ感ずることが出來るのである。

心の此の喜びを味得體驗すればするだけ、我等は深き愛の人となる事が出來るのである。心の此の喜びこそは、我等が愛の人たるがための心の糧である。此の糧を食べる事いよいよ多くして、我等はいよ〳〵愛の人として育ち行くのである。

之を肉體的に考へて見ても、腕を使うより外に、腕を發達させる道はなく、足を使うより外に足を發達させる道はない。

精神的諸能力についても、之と全く同じ原則の支配を受ける。意志の力を使うより外に意志の力を強くする道はなく、愛の實行をよそにして、愛の人たる道はない。

あゝ、愛の人になりたい！　だが私は、愛し得ざる惱みに泣くことすでに久しいものがある。求めよ、さらば與へらるゝのだ。よしさらば、我はどこまでも此のみ言葉を信じて、ひたに祈らう。（大正十四年十二月）

三　小さな火は風に消えても

小さな火は一寸した風にもすぐ消されるが、大きな火は滅多に風に消されないばかりか、風が吹きつけて來れば來るほど焰々として燃えあがるのである。

我々がいゝ心を持つて居ても、他の一寸した仕向けのゆゑに、そのよき心を打ち消されてしまふのは、我々のよき心が小さいからである。

我々が偉大なる神の愛に繋がつて居る限り、他が我々にどんなしむけをして來ようと、もう大丈夫である。他のしむけがつらければつらいだけ、我の愛の火は焰々として燃えあがるのである。（大正十五年二月）

四　信仰生活と其前後

我等は、不完全なる此の世の批判を恐れて、此の世に迎合してはならぬ。

偏に神を恐れ、神にのみに頼る信仰生活にはいつて、始めて、我等の心は落ちつく。

我等が信仰生活に入り、偏に神の御旨をのみ行ふべく覺悟しても、日常、個々の場合を如何に處するのが最善なりやと考ふる時、そこに、智慧の必要があることは、信仰生活にはいらぬ前と何等のかはりがない。たゞ、信仰生活にはいらぬ前は、如何にせば、己れの名利が得らるゝだらうかと、巧利的、打算的にのみ働いて居た智慧が、信仰生活にはいると、一にたゞ神の御榮えを顯はさんが爲めにのみ働くようになつてくる。

但し、悟後の修養未だ圓滿せざる間は、兎角に、其態度が世とかけ離れたものになつてしまつて、それが爲めに大いに人に不愉快の感じを與へ、遂に己が信ずる宗教そのものにまで人の反感を招くようなことがある。心すべきである。（大正十五年二月）

五　神を呼ぶ

私に「神は果してあるものですかないものですか」と訊ねる人がある。そう云ふ質問を發する人と私の心持との間には、かなり大きな隔たりがある。神を呼び、神を呼び、神を呼ぶことによつて私は慰められ、勵まされ、力づけられて居る。神こそは實に私の生命そのものである。神なしには生きて居られぬのが僞らざる今の心持である。

聖書には「見ずして信ずるものは幸ひなり」とあり、オーガスチンは「見ずして信じ、信じて後見ることを得」と云つて居る。

私も嘗ては「神とは何ぞや」と云ふ問題の解決から宗教にはいらうとつとめたことがあつたが、そんなことでは到底宗教に這入れるものではない。宗教は思索的遊戯でなくして直感直覺すべきものである。どんな人でも自分の生命に係はる非常の場合には、一切の理屈を超越して「神よ、助け玉へ」とたゞ神にすがる氣持になる。その眞劍、その切迫した心持から

突込んで、始めて宗教的信仰にはいれるのである。

自力で行ける限りは自力で進む。けれども人生の行路には、自力だけではどうすることも出來ぬ時がある。その時こそは神を求め神を呼ぶ心が起きる。

泣いて暮らすも一生、笑つて暮らすも一生、同じことなら笑つて暮らしたいと云ふのがすべての人の願ひである。でも、我等は、もう一歩深く考へて見たい。よし笑つて暮らすも一生であつても、それが神から離れたところの、神の御旨に悖るやうな淺薄な笑ひであるならば、私はむしろ泣き泣きでもいゝから、神とぴつたり結びついた、深刻の生活を欲する。

よし神ありとするも、それが、我等の生活に交渉のない限り、あれどもなきが如きものである。神が我等の生活に交渉を生じたとしたら、少なくとも我等にとつて神は明かに存在するのである。

世の中には、神は修養の手段として人間が案出したものだと云ふ人がある。そう云ふても言へないことはない。けれどもそう云ふ氣持の存する限り、その人にはまだ眞の宗教がないのである。

聖書には誰れが讀んでも始めからすぐわかる處と、始めにはどうしてもわからぬ處とがある。贖罪と云ふことは、私には始めはどうしてもわからなかつた。それが、幾多の體驗を經て、このごろ、やうやくすこしわかりかけて來た。わかりかけて來ると、それが基督教の一番ありがたい處であるように思へる。

義人のなやみなしには罪人は到底救はれない。罪人が救はれる爲にはどうしても義人のなやみが必要である。不出來な子が救はれるまでに、よき親がどれだけ多くなやむことであらう。不出來な夫が救はれる迄に、よき妻が如何に多くなやむことであらう。不出來な親、不出來な妻が救はれる爲めにも、同じくよき子よき夫が如何に多くなやむことであらう。罪をにくんでその人をにくまず、如何にもしてその人を罪から救ひ出したいものと祈り求むる心が最高潮に達したものが贖罪である。十字架である。クリストの十字架上の心持を以てして解決出來ない人と人との問題は、天下に一つもないのである。（大正十五年四月）

六　人生の勝負

生徒に心から「ありがたい先生だ」と思はれるほどの先生の言ふことなら、生徒はさながら催眠術でもかけられたかの如くその先生の言ふことをきく。子供に心から「ありがたい親だな」と思はれるほどの親の言ふことなら、子供はさながら催眠術でもかけられたかの如くその親の言ふことなら何でもきく。

妻の心から「あゝありがたい夫だな」と思はれるほどの夫の言ふことなら、妻はさながら催眠術でもかけられたかの如くその夫の言ふことをきくのである。

身にそれだけの徳のないものが、如何に口やかましく説法しても、説法すればするだけ先方は反逆の態度を増すものである。

同じく親が子供をたしなめるにしても、我が子のよき習慣をつくりあげる爲めにするものあり、我子のあしき習慣を矯正する爲めにするものあり、前者は先手を打つたもので、後者は後手に出たものである。賢きものは何事にも常に先手を打ち、愚なるものは萬事が後手に出る。人生勝敗の岐るゝ處は、一に先手を打つか、後手に出るかにある。

（大正十五年四月）

七　「我」を測る

人間は利己的であればあるだけ、自分の利己的なることを反省する力がなくなつて、相手の利己的なる事を感ずる力のみが強くなつてくる。相手の利己的なることが癪にさわつてたまらぬ時は、自分は先方以上に利己的になつて居ることに氣をつけねばならぬ。

我より以上の人格者は、我の利己的なることを認識してもそれをゆるしてくれる。

その力、我より以下の人は、心には含みつゝも我に反抗しては來ない。たゞ我と同じ位の程度の人であつて、我と同じ様の利己的の人が、我に打ちかゝつてくる。世の中はかうした闘争を繰りかへして居る。

悪人の悪人たる所以は、自分に接するすべての人を悪化させる處にあり、善人の善人たる所以は、自分に接するすべての人を善化する處にある。私共は誰にもせよ、實に不出來なものだ。赦されて生きるより外に生き方がないのである。

他から一だけの利己的仕向けを受けて一だけの苦痛を感ずるものを普通の人であるとするならば、その普通の人より十倍我の強い人は他から同じ一だけの利己的仕向けを受けて十倍の苦痛を感じ、百倍我の強い人は他から同じ一だけの利己的仕向けを受けて百だけの苦痛を感ずるのである。故に我が他の利己的仕向けを受けて強い苦痛を感ずれば感ずるだけ、我れも亦我の強い人間だと云ふことを自覺すべきである。

信仰のあつきものは他からいくら利己的仕向けを受けても我はそれにつり出されない。信仰有るものにあつても、それが淺きものは、他の我につり出されて自分も亦同じく我の人になつてしまふ。

それで、我の強い人と我の強い人とが相對峙して、恐ろしいほど惡み會ひ呪ひ會ふことになるのである。

我の強い人は、他からそれを指摘されることを非常にいやがる。自分より力の少ないものがそれを指摘すると、彼は非常なる憎惡の念を以てその人に對し、自分より力ある人がそれを指摘すると、彼はアタフタとうろたへて、切りと之を辯解し、若しやその人に捨てられは

せぬかと夜の目もねられぬほどに苦悶する。

その我が碎けた時、その人は本當に優しい人になる。その我が碎けた時、その人は一切の苦悶から救ひ出される。神の最も喜び給ふは碎けたる心である。

神に反ける一人の人の魂を、神の方へふりむけさせることの出來たことは、我に於ては昔の大名が、一つの城を陷れた以上の喜びである。（大正十五年四月）

八　闘志潰ゆ

闘犬や闘鶏が、一度其相手と闘つて敗けると、其闘志がすつかり碎けてしまつて、次に相手と立ち向ふ時には、始めの時の威勢はどこへやら、氣力も非常に弱くなり、二度、三度、四度と敗けるに從つて、いよ〳〵屁古垂れてしまふのである。

丁度それと同じ樣に、私共の心の中には、善人になりたい、善いことをしたいと云ふ本心があるのであるが、それが相手のつれなさと闘つて、一度敗れ、二度敗れ、三度敗れと云ふ風に、だん〳〵敗けて行くと、しまいには本當に見るも憐れにいぢけてしまふのである。そのいぢけぬいた本心では、もう何の善きことも出來ないのである。人間が、自分の心だけを眺めて居ると、誰れだつて皆そう云ふことになつてしまふ。

然るに我々が、一と度眼を轉じて、全能者を見あげ、その全能者と一つになつて立つならば、我には能はねど神には能はぬことなし、凡てに勝ち得て尙ほあまりある驚くべき力が與へられる。つまり我々の心が、一番弱くなつた時に、一番強くなる道が啓示されてくる。

九　悪口を言はれたら

人が、かげで我の悪口を言ふのを聞いて、あの野郎！　失敬な、面と向つて言ふのならまだしも、蔭でかれこれ言ふが如きは卑怯千萬であると怒る人がある。

私はそうは思はぬ。自分で自分を考へて見てさへも、時々、自分はどうしてこんな不出來の人間だらうと覺えず歎聲が洩れることさへあるのだから、人から見たら、どんなに不出來に見えることだか知れたものでない。

人が我について彼れ是れ文句をつけたいのは、つまり我の何處かにまだとり去り切れない缺點があればこそである。如何にもして、すべての缺點をぬぐひとつてしまひたいと希ふ心の切なる我は、誰でもいゝ、私の缺點を見付けたら、何の遠慮もいらぬ、その時すぐそれを指さしてほしいのだ。面と向つて言ひにくければ、蔭でもいゝから言つてほしいのだ。

（大正十五年四月）

一〇　危きに近よれば

嘗て私は、お祈りの言葉の中に「我等を試みに會はせず、惡より救ひ出し給へ」とあるのを見て、何となく意氣地のない、卑怯の樣に感じたことがある。が今にして初めて本當に親切なみ教へであることがわかつて來た。我等はやはりかく祈らなければならないのだ。

論語に「君子危きに近よらず」とあるが、私は、たとへ危きに近よつても、その危きに陷らない樣に注意をすればよいとばかり思つてきた。けれども物事を體驗してみると、かく思ふのは餘りに自分自身を買ひかぶつて居たことがわかるのである。

我等は、ある程度まで危きに近よれば、到底、その危さから免れることが出來ないものなのである。

ナイヤガラの瀑布は、オンタリオ湖から流れ落つるのである。オンタリオ湖は非常に景色がよいので、船遊びが盛んに行はれる。ところで瀧に近づけば危いといふことは誰でもが心

得てゐることだけれども、此の邊までは大丈夫で、それから先が危險だといふ、その境界線にふみ止まることは實にむづかしい。四邊の景色に打ち興じて、まだ〳〵安全だと思つて漕いでゐる中に、ハツと思ふがもうおそひ、多くの人が急流に捲き込まれて了ふのである。

君子危きに近よらず、君子でさへも或る程度以上の危險圏内に入れば、もう到底その身を全うすることは出來ない。それを自負心の強い小人が、如何に近づいた所で、悪い事さへしなかつたらと云つて近づいて行く。悪い事さへしなければよいが、然し或る程度以上に近づいて行くと、悪い事をすまいと決心して居ても、どうしてもしなければならなくなつて來るのだ。であるから、間違ひを欲しないならば、初めから危きに近よらぬ方が安全である。

最初、私は、試みに會つても、それに打ち勝ちさへすればよい。否寧ろ、試みに會つてみる方がよいといふ様に考へてゐた。だが今にして思へば、それは餘りに身の程を知らぬ傲慢な態度であつた。

「我等を試みに會はせず、悪より救ひ出し給へ！」

この祈りは、本當に有難い、親切なる教へである。（大正十三年三月）

二　流れを逆にして泳ぐ

人ありて「私は實に愛の乏しい人間であります。どうしたら愛の豐かな人になることが出來ませうか。私には特に愛さねばならぬ人であつて、愛しにくくつて困る人々があります、どうしたら、それ等の人々を眞に愛する事が出來ませうか」と尋ねるならば、道德的修行系統の人々は、それに對して、いつもかう云ふのである。

「畫家にならうと思ふならば、つとめて畫の稽古をすることだ、それより外に畫家になる道はない、又書家にならうと思ふならば、つとめて書の稽古をすることだ、それより外に書家になる道はない、それと同じく、愛の人になりたいならば、その愛しにくい人をつとめて愛することだ。それより外に愛の人になる道はない」

と。いゝ事をさせることによつて、いゝ人を作り上げる。つまり外を制して内に達する求心的努力が道德的修行である。

その反對に、いゝ人にして然る後いゝ事をさせる、つまり内を化して外に及ぶ遠心的努力

が宗教的修行である。

内を化して外に及ぶのが順で、外を制して内に達するのは何と云つても逆である。

流れを逆にして泳ぐ。

それは貴い意氣ではあるけれども、無理は決して長續きのするものではない。

（大正十五年十月）

一二　惡毒に克ちたる力

一夫一婦といふことは、今日では當然すぎるほど當然の人倫道德とされて居るが、一時その一夫一婦論が盛んに高調された時代があつた。その當時、一夫一婦論を高唱した人達は、何れも皆よき妻の持主であつて、之に反對を唱へたり、又は之を默殺したりした人々は、何れも、みな、惡しき妻のために苦んでゐた人達であつた。

婦人にして、最も男子の節操を八釜しく論ずる人は、その夫に、放蕩亂倫の人が多く、然もその夫の放蕩の原因は、その婦人自身の不出來から來た場合が多いように思はれる。

今日離婚といふ事を、許すべからざる大罪惡の如くに感じ、如何なる場合にも、離婚は不可である、どんな憂き辛さを忍んでも、一生添ひ通すべしと云ふ風に主張する人々があるかと思へば、又一方には、人から離婚の相談を受けて、直にその離婚に賛成し、若しそれが、少し調子の惡いやうな夫婦でもある場合は、寧ろ離婚を奬めると云つた態度の人々がある。